

近世ロシアの民間習俗をめぐる 国家・教会・社会

— シンビルスクの「呪術師（魔法使い）」

ヤーロフの事件とその背景 —

豊 川 浩 一

要旨 シンビルスク市のボサード民（商工地区住民）ヤーコヴ・ヤーロフはアンナ女帝時代（在位 1730-40 年）の 1732 年 8 月 5 日、シンビルスクで「異端」の嫌疑により逮捕された。それは彼の妻ヴァルヴァーラ・ベトロヴァによるシンビルスク市役所（Paryma）への密告が発端である。逮捕から判決まで 3 年半にわたり拷問を含めヤーロフに対する尋問が続いた。その尋問の過程で浮かび上がるのは、ヤーロフが所有していた「異端」・「呪術」（「魔法」）の書によって彼自身が呪術（魔法）を習得し、それを使って病人の治療にあたったということである。ヤーロフが治した同じ町のボサード民たちは、彼を「異端者」・「呪術師」（「魔法使い」）とは認識せず、「治療師」として尊敬していると証言した。しかし当局は先の書が「異端者ヴァルラアム」の教えに基づいて作成され、彼はそれに基づいて行動したと断定した。とはいえヤーロフがどのようにしてその教義を知り、またどの程度それを受け容れたのか、等の点については依然不明のままである。ヤーロフ自身は自らの信仰についてそのすべてを吐露してはいるが、当局が彼を具体的にどのように認識していたのかも判然としない。最終的には、法律の定めるところに従い、1736 年 3 月 18 日、ヤーロフは「異端者」として火刑に処せられた。

上記の事件は近世ロシアに多数現れた「異端者」・「呪術師」（「魔法使い」）に関する事件の一例に過ぎないように見える。しかしこの事件の審理を通して見えてくるものは、一方で神を冒瀆することや古儀式派等の異端などを含めた当時の民間習俗のあり様であり、他方で民衆の生活全般を厳しく取り締まろうとするロシア政府の姿勢であった。事件に対して、『ウロジェーニエ（1649 年会議法典）』を基本法規として、ピョートル 1 世の『陸軍操典』や『海軍操典』、さらにはアンナ女帝時代に発布された布告等を引用して判決を下している。そこには近世ロシア国家がキリスト教化を図りつつも、いわば一層の「社会の規律化」を遂行していこうとする意志が強く表われていたように見える。

キーワード：民間習俗、呪術師（魔法使い）、ヤーコヴ・ヤーロフ、社会の規律化

はじめに

民間習俗研究としての「呪術師」研究

われわれはロシア人特有の習慣に驚かされることがある。例えば友人を迎え入れるとき、敷居をまたいで握手することは良くないとされる。別離に際しては、椅子に腰かけ沈黙のうちにしばし時を過ごす。話し相手が不吉なことを言ったり行ったりすると、「悪魔よ、去れ！」と言いながら、肩越しに大地に3度唾を吐く行為を見かけることもある。こうした現代の習慣はソ連時代（そしておそらくは帝政時代）にも見られたが、研究の困難さから歴史研究の対象とはされにくい問題であった。しかし上記のような習慣を具に見て行くと、そこにロシアの国家・教会・社会が織りなす複雑な関係が内包されていることに気が付く⁽¹⁾。

民衆固有の世界を解き明かそうとする努力は、欧米における歴史学ならびに隣接諸科学の課題の一つとなり、実際大きな成果が表れている。ヨーロッパの中近世史に関する K. ギンツブルグの『ベナダンティ』や『チーズとうじ虫』はその代表である⁽²⁾。E. ル・ロウ・ラデュリの『モンタイユ』と『南仏ロマンの謝肉祭』⁽³⁾、および Y-M. ベルセの『祭りと叛乱』⁽⁴⁾ は地域の民俗誌と住民共同体の行動について明らかにした。N. Z. デーヴィス⁽⁵⁾ と E. P. トムスン⁽⁶⁾ はシャリヴァリという側面に注目した。また M. バフチンの『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』⁽⁷⁾ は民衆固有の文化を描く傑作である。翻って日本においても阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男』は伝説と現実（歴史）を繋ごうとする試みにおいて読者を魅了した⁽⁸⁾。以上は活き活きとした習俗慣習の中に生きる民衆の生の姿をわれわれに示す手本である。

また「呪術」・「魔法」という民衆の社会心理を含む習俗慣習に関する問題も上述の研究者たちによって注目されてきた。特に近世ヨーロッパは「魔女狩りの狂気 (the witch craze)」として知られる現象に覆われた。それが18世紀初頭に終焉するまで、この大衆ヒステリー現象はかなりの数の犠牲者を出したが、その多くは女性であった。時には、彼女たちはほとんど根拠が乏しいまま隣人に対する有害な悪事 (maleficia) を企てる者として、あるいは教会に対する異端者として捕まえられ、拷問され、裁判にかけられ、そして処刑された。イギリスの歴史家 R. ブリッグスは、「近世のヨーロッパを理解するためには魔法を理解しなければならない」⁽⁹⁾、と結論付ける。その一方で、H. R. トレヴァー＝ローパーは次のように述べている。「1054年の宗教上の大分裂 (Schism) によって、カトリックのポーランド、すなわちカトリックの支配をはっきりと示す例外を除き、ヨーロッパのスラヴ諸国は、キリスト教の歴史の上で最も評判の悪いエピソードの一つに加わることを免れた」⁽¹⁰⁾。また N. コーンも、こうした「魔女狩りという現象はもっぱら西ヨーロッパに限った現象であり、東ヨーロッパの正教キリスト教世界には影響を及ぼさなかった」、と言う⁽¹¹⁾。

果たしてモスクワ国家は近世ヨーロッパで猖獗を極めた「魔女狩り」と無縁であったのだろうか。これに対し、H. Я. ノヴォムベルグスキーは必ずしもそう考えてはいない。帝政末期の1906年に刊行された17世紀モスクワ国家の魔法使い・呪術師に関する裁判記録集の前書きで、彼は次のように述べている。「ここで提供する歴史史料の全体的な意味を考慮すると、われわれはロシアにおける魔法使いの裁判が西ヨーロッパの場合と同じ程度の残酷さを持って行われたということ、またモスクワ国家当局が、カトリックやプロテスタントの諸国でそうであったように、こうした裁判に熱心に協力したのである」⁽¹²⁾。事実、彼が古文書館で蒐集した魔法使い・呪術師に関する裁判資料はそのことをよく示している⁽¹³⁾。

とはいえ15世紀末～17世紀末のヨーロッパにおける「魔女狩り」という集団ヒステリー現象はロシアではみられず、また男女比も異なっていた。すなわちロシアの正教キリスト教神学では、悪魔に関する観念が西ヨーロッパほど詳細ではなく、また裁判における自白も、魔女の夜宴（サバト）や悪魔との性的関係というモチーフもほとんど見られないという⁽¹⁴⁾。さらには裁判にかけられた男女の比率も、ヨーロッパでは魔女裁判の被告の約80%が女性だったのに対して⁽¹⁵⁾、17世紀にモスクワの裁判所に呪術に関連したとして告発された99名のうち女性は約40%（40名）でしかなかった（なお、そのうち21名が釈放され、10名が火刑、5名が流刑、3名が拷問中に死亡、1名が逃亡、1名が教会裁判に付され、残りの58名の判決は不明である）⁽¹⁶⁾。

A. C. ラヴローフは18世紀前半のロシアの魔法使い・呪術師（волшебник, колдун）の典型的な特徴を次のように言う。「何よりも黒髪、黒目、浅黒い皮膚」をしており、そうした典型は親から子へと受け継がれていく。治療師（знахарь）と異なり、呪術師（колдун）はしばしば土地の者にとっては「よそ者（чужой）」であった。兵士であつたり、都市民にとっては農村の住民であつたり、農民にとっては非農耕民である馬医者（коновал）、粉挽人（мельник）、牧童（пастух）、などであった。結局のところ、18世紀ロシアの呪術師は女性よりもかなり男性が多かった⁽¹⁷⁾。なお、18世紀では「魔法使い」と「呪術師」はほぼ同じ意味として使用されたと考えられるが、本稿では主に「呪術師」を使用する。

象徴的に呪術師を描いた絵画としてモスクワのトレチャコフ美術館所蔵の『農民の婚礼にやって来た呪術師（Приход колдуна на свадьбу）』（В. М. マクシーモフ作）という作品がある（図1を参照）。1875年に完成したこのロシア移動展派の絵は農民の風俗を真正面から取り扱ったものとして同時代の風俗画の中でも抜きん出ており、またセンセーションを巻き起こしたと言われる。実際の絵を見ると、キャンヴァスの右手に描かれている呪術師は今やって来たと言わんばかりに頭に雪をかぶっている。当時、婚礼の宴席には呪術師を呼ぶ習慣があつたが、村人たちがそうしなかったためにその復讐を恐れてか、宴の真最中にいた新婚の若夫婦は立ち上がってこの呪術師を茫然と見つめている。坂内徳明によると、民俗学者のЭ. В. ポメラーンツェヴァ

がこの絵画を取り上げ⁽¹⁸⁾、「題材となった呪術師の存在は単に偶然に選ばれたものではなかったという」⁽¹⁹⁾。マクシーモフ自身、19世紀末にテーニシェフ伯爵が組織して中央・北部ロシアの民衆習俗調査に多くの成果を残した「民俗学事務局」の通信員であり、彼が1870年代に採集し、後に事務局に送付した資料の中に、先の絵の典拠と思われる記述が見られるという⁽²⁰⁾。坂内は婚礼の場に姿を現す当時の呪術師の「リアリティ」について論じているのである。

ロシアには、正教の他に、精霊信仰、死霊信仰、大地や聖樹・聖石などに対する自然崇拜、正教から離れた異端的な宗派、古儀式派、呪術や迷信が存在してきた。さらには少数民族の土着的宗教やシャーマニズムがあった⁽²¹⁾。重要なのは、正教以外の宗教的観念が正教キリスト教受容の後でさえ現代に至るまでロシア人民衆の現実生活の中で「リアリティ」をもって機能しているということである。

ロシアの民間習俗（「呪術師」問題）に関する研究動向

19世紀、ロマン主義の影響下でロシア民衆の口頭伝承が知識人階層によって「発見」され、1840年代には民俗学・口頭伝承学が学問として確立した⁽²²⁾。呪術もまた、ロシアの貴重な民族文化、失われつつある古き文化の残滓として記録・保存されるようになった。しかし帝政時代の豊かな研究成果は革命後十分に生かされることはなかったのである。

呪術に関する最初のまとまった民俗誌資料は、呪文、呪術的儀礼、占いなどが多数収められたИ.П. サハロフの手になるものである。その後、Л.Н. マイコフ、М. ザブリリン、С.В. マクシーモフ、Н.Я. ノヴォムベルグスキー、Н.Н. ヴィノグラードフらも上記の問題に関して基礎となる資・史料集や研究書を著した。特にノヴォムベルグスキーは17・18世に魔術・呪術を行ったとして告発された者に対する裁判文書の刊行に大いに力があり、それは当時の社会との関係を考える上で重要である。またロシア各地から寄せられた膨大な資料をもとに、民間における病気の呪術的・宗教的原因論や治療法を集成したГ. ポボフの研究も有益である⁽²³⁾。

ソ連時代に入ると、Н.А. ニキーチンやЛ.В. チェレプニンらの研究はあるものの、研究は宗教問題に対するタブーから帝政時代の成果は十分には生かされなかった。Н.Н. ボクロフスキーらによって古儀式派との関連で民衆の習俗慣習が集中的に研究されるようになったのはソ連時代後期になってからである。ソ連崩壊後から21世紀にかけて、呪術のみならず、言葉による瀆神や異端の問題を古文書史料に基づいて民衆の宗教観・世界観を明らかにしようとするА.С. ラヴローフやЕ.Б. スミリャンスカヤらの新しい研究が現れた⁽²⁴⁾。

他方、ロシア以外でもモスクワ国家の魔法使い・呪術師に関心を抱く研究者のなかにR. ズグータ、V.A. キーヴェルソン、W.F. ライアン、白石治朗がいる⁽²⁵⁾。最近では、藤原潤子もカレリア地方での聞き取り調査によって現代ロシアにおける呪術の「リアリティ」を問題にしている⁽²⁶⁾。

しかし 18 世紀に関する研究はいまだ途についたばかりである。そのため次のような問題点がある。第 1 に、18 世紀の啓蒙思想との関係が十分に説明されていない。これは近年筆者が構想している「18 世紀啓蒙思想と学術遠征」⁽²⁷⁾ というテーマとも密接に関連する問題である。科学アカデミーによる学術遠征はヨーロッパ啓蒙思想の影響を受けて中国への道をシベリアに求めたことが発端の一つであるが、その中心メンバーがドイツ人やフランス人などの外国人であり、その調査内容もロシアにおける植物相や動物相、地方住民（特に先住民）の風俗習慣を明らかにすることであった。すなわちロシアにおける非ロシア的（あるいは非ヨーロッパ的）なるものの「発見」、言い換えるとロシアの「帝国性」に主眼があり、必ずしもロシア人の風俗習慣に関心が向いていたとは言えなかった⁽²⁸⁾。

第 2 の問題点は、18 世紀ロシアの国家・教会・社会という制度的な枠組みのなかで論じている研究がないということである。従来の研究はデーモノロジー（悪魔学）、アンチ・キリスト、呪術の内容そのものに関心が集中していた。そこで本稿では、「魔術」・「呪術」とロシアの国家・教会・社会がどのような関係を取り結んでいたのかを中心に検討することにする。

史料について

われわれのテーマ全体に関する史料は甚だ多いものの、そのうち刊行された史料は僅かではない。刊行史料のうち、そのほとんどを占める裁判審理での尋問調書は上に挙げたノヴォムベルグスキー、ラヴロフ、スミリャンスカヤらによって調査研究された。しかし 18 世紀ロシア民衆社会の全体史的理解を目指す筆者の立場からすれば、上記史料の中から特徴的なものに焦点を当てて検討する方が、歴史的に人間の社会活動地域が形成されてきたいわば「歴史的生活空間」の解明にも寄与できると考えられる⁽²⁹⁾。それゆえここでは史料の限界があるものの、事件と裁判の経過が史料的に明瞭で時期区分として画期をなすであろう「ヤーロフ事件」を取り上げて考察する。

この「ヤーロフ事件」に関する史料は 2 種類ある。第 1 の史料はモスクワのロシア国立古法文書館（Российский государственный архив древних актов—РГАДА と略記）に保管されている元老院文書中の 1740 年 10 月 22 日付「カザン県官房から元老院宛て。非常後備軍命令の報告」（РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1223-1225об.）と題された表裏合わせて 6 葉からなる文書である。また第 2 の史料はペテルブルクのロシア国立歴史文書館（Российский государственный исторический архив—РГИА と略記）に保管されている文書群（РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. 1740 г., Л. 1-15）である。こちらは宗務院によって取りまとめられたものが主であるが、元老院関係の史料も含まれている。

ほぼ同じ内容を有する第 1 と第 2 の史料を合わせて検討することにより、事件・裁判の経緯、当時の民衆の習俗慣習、および当局の動向やその背景となる考え方を明らかにすることができ

よう。なお史料が元老院と宗務院の双方に存在していることは、聖俗の両当局者が共にこの同じ事件に注目していたことを窺わせて興味深い。

第1の史料の最初の紹介は、事件が発生して約150年たった19世紀末、『ルースキー・アルヒーフ』誌（1886年、3号）に掲載された「シンビルスクの魔法使いヤーロフ」と題するD. サポージニコフによる記事である⁽³⁰⁾。これは本文それ自体5頁ほどの短いものである。サポージニコフの「紹介」の内容には原史料そのものにはない潤色が見られる。その異同については、筆者が行った古法文書館での手稿史料の閲覧・検討により確認された。なお紹介記事を書いたサポージニコフはそのイニシャルから『ロシア分離派における焼身自殺（17世紀後半から18世紀末まで）』の著者であろう⁽³¹⁾。そうだとすれば先の潤色も「分離派」的要素をこの事件に見ようとする結果だったのかもしれない。その後、ソ連時代およびロシアになってから、第2の史料を基にしてO. Д. ゴレルキナとO. Д. ジュラヴェリは悪魔と契約を結んだ人間の一人としてヤーロフの事件を取り扱った⁽³²⁾。また前述のA. C. ラヴローフとE. Б. スミリャンスカヤもそれぞれの著書で、この事件を含めた18世紀の呪術師に関する膨大な裁判記録を調査している⁽³³⁾。しかし第1と第2の史料双方に批判を加えながら検討した研究は管見の限りでは存在しない。また筆者が述べた先の研究史上の第2の問題点に迫る研究もない。それゆえ本稿では両者の史料を補完的に利用しながら事件、裁判の推移、および元老院と宗務院を中心とする官庁間でのやり取りに注目する。

第1章 近世ロシアにおける呪術

第1節 近世社会における呪術の「リアリティ」

ロシア社会と呪術の関係

19世紀の言語学者B. И. ダーリは、その有名な辞典で「悪魔（бес）」の項目を立て、ロシアにおける悪魔とは何かを分類分けをしながら列挙している⁽³⁴⁾。また魔法・呪術・妖術を意味するロシア語は実に多様である。ведовство（物知り）、заговор（呪文を唱えること）、колдовство（呪術をかけること）、чародейство（魅惑すること）、чернокнижество（黒い本——すなわち呪文が書かれた本）、шептун（（呪文の）囁き）、等々である。これほどまでに近似する意味内容を有する多くのロシア語が存在するということは、魔法・呪術・妖術が日常的にロシア社会に浸透していたことの証左である。

ロシア・フォークロアのプロトタイプ的魔法使い（呪術師）バーバ・ヤガーに代表されるように、ロシアの魔法使い（呪術師）は一般的に彼らの力を良きこと悪きこと両方のために使うことができるとされた。魔法・呪術は民間の間で広く実践され、20世紀初頭まで、否、21世紀の今日までも「リアリティ」をもって存続し続けているという。なお、上述のような様々な語によって知られている魔法使い・呪術師も主に男性にはколдунが、女性にはведьмаが使

われた⁽³⁵⁾。

近世の呪術についてはイギリスの歴史家 J. M. ハートレイも注目し、その著『ロシア帝国社会史』のなかでわざわざ「魔術 (magic)」という項目をたてているほどである⁽³⁶⁾。通常、異教的な祝祭は農村の問題であったが、社会の上層にも影響を及ぼしていた。たとえば当時の慣例に倣ってツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィチ（在位 1645-76 年）は夏至のイヴァン・クパーラの日に呪術用の草を集めることを臣下に命じた⁽³⁷⁾。また 1670 年、ツァーリの息子が死の床にある時、アレクセイは高位の役人を遣わして「根、草、石、そして呪術から病人を守るために使う書かれた呪文」を得るため最近老齢で死んだ女呪術師の家を探させ、また彼女の娘に「彼女〔呪術師〕はその技を誰か他の人に教えたかどうか」尋ねさせた⁽³⁸⁾。さらに 1675 年、フェニカと呼ばれる呪術師を匿っているという嫌疑をかけられた Ф. Ф. クラーキン公は逮捕され、フェニカは尋問され拷問のうちに死んだ⁽³⁹⁾。

ピョートル 1 世（在位 1682-1725 年）時代に社会の上層で始まった西欧化＝近代化以降、上層階級における呪術の役割はもはや従来ほど大きな意味をもたなくなったように見える。とはいえピョートル 1 世は自分の夢を記録し、その行動の多くがロシアの貴族エリートを惹きつけ、神秘主義と呪術の境界が曖昧であるフリーメーソンと関係を持っていた点は指摘する必要があるのかもしれない⁽⁴⁰⁾。

その一方で、呪術行為と民衆の抱く迷信に社会は影響を受けていたと見なくてはならない。1731 年、ノヴゴロドの行政長官（ландрат）は出産や銃についての呪文や祈りを知っており、夢判断や予言の書、様々な草、根、そして彩色が施された石を所有していた廉で訴えられた。1754 年、スーズダリの主教ポルフィーリーの報告によると、呪術はどの家でも見られるほど盛んで、特に結婚式や分娩の時には重要だという⁽⁴¹⁾。

上のような状況は 19 世紀に至るまで存在し、外国人の記録にもそれが散見される。科学アカデミー総裁を務めた E. P. ダーシコヴァ侯爵夫人の招待でロシアを訪れたアイルランド人マーサ・ウィルモト（Martha Wilmot）は、1807 年 2 月 13 日の日記に次のように記している。「より下層階級の人々は、妖精、呪術師などの力と影響力を確信している。より高位の階級の男女はカードで吉兆占い（*la bonne aventure*—強調原文、筆者）を楽しみ、その占い結果の善し悪しで幸せになったり惨めになったりするのである」⁽⁴²⁾、と。

ロシアにおける呪術の特異性

呪術行為の多くは西欧でも記述されている。ロシアが必ずしも例外的だったと考えることはできない。ただロシアが西欧と異なっているのは、宗教的・社会的に相対的な「自由」があったという点である。この「自由」を保持しながら、農村社会は教会や政府から効果的な制約を受けることなく、呪術が実践されたのである。

ロシアの呪術師は伝統的に男性であるが、女性（しばしば助産婦である）もまた呪術や運勢占いをおこなっていた。呪術や占いを行う上で最も密接な場所は、教会、墓場、納屋、敷居（入口）、氷原にあいた穴やホップ畑、風呂小屋、そして道と道の交差する十字路であった。また呪術が行われる時刻は真夜中である。かくして真夜中の風呂小屋が呪術にとって最適の場所と環境を提供することになる⁽⁴³⁾。ほとんどのロシアの農家は風呂小屋を持っており、そこに関する多くの迷信がある。一般的に風呂小屋の精バンニクがすべての精の中で最も悪意のある精であると思われていたが、通常そこで出産がなされ、また花嫁の婚礼前に儀式的の歌が歌われ、湯あみも行われたのである⁽⁴⁴⁾。

第2節 呪術の対象

子供と呪術

呪術は生と死、愛と幸福、そして全階層の人々に等しく関わる出来事と関係していた。乳幼児の死亡率の高さは、特に階層差に関わりなく社会のすべての人々を誕生とその後の最初の数年間を取り巻く呪術や異教的実践へと駆り立てた。特別な草を煎じて飲むこと、歌を歌うこと、花嫁が結婚式の時に様々な服や飾りをつけること、および呪文を唱えることは、農民たちによって子供が誕生する時に行われた。産婆たちは新生児に呪文をかけさえた。当時、悪魔が子供たちを餌食にしていると考えられたからである。悪魔は子供たちをさらい、捕まえ、あるいはおどけて夜に子供を起こし、泣かす、と考えられていた。また子供に鏡を見せ、子供を目の高さより上に持ち上げ、身体を洗っている間に子供に話しかけ、最初の誕生日が来る前にその爪や髪を切ったりするのはその子が不幸となる原因とみなされた⁽⁴⁵⁾。

19世紀前半にイギリス・外国聖書協会の仕事でロシアを訪れたロバート・ピンカートン(R. Pinkerton)は次のように述べている。見知らぬ人の前で子供たちにその洗礼名で呼びかけてはならなかった。なぜなら、そうすることによって子供に悪い呪文がかけられることを人びとは恐れたからである。また「そのような不吉な出会いがあれば、同時にあらゆる邪視や悪魔の影響を退ける祈りを繰り返しながら、大地に何度も唾を吐くのである」⁽⁴⁶⁾。

流産、死産および幼児の死は農民だけが経験したのではなかった。あらゆる階層の人がそうであった。18世紀の有名な農政家 A. T. ボロトフの妹は地方貴族の婦人であったが、幼児期にある子供を幾人も失っていた。それ以来、彼女は新しく生まれた息子の生存を願い、彼らを特別なアイコンのように扱い、子供を彼女が会った初めての人の名前にちなんで名付けた。もちろんそのような迷信は18世紀のロシアに特有というわけでもなかった⁽⁴⁷⁾。

様々な呪術

通常、配偶者か愛人の愛情を勝ち得るため、あるいはそれを取り戻すために、薬を一服盛っ

たり、呪文をかけたりした。1770年、農民某が寡婦の愛を獲得しようと魔法の呪文を使ったとして訴えられた。彼はある言葉を書いてそれを寡婦が飲むワインの瓶に吹き込んだのである。また、1812年、ダリヤ・カルガーノヴァ（シベリアのヴェルフネ＝オムスク郷出身）は「魔法の薬（волшебное снадобье）」を調合し、「家族が彼女を苦しめず、彼女を愛するように」、夫を含めた「家族全員の食べ物に」それを混ぜようとした⁽⁴⁸⁾。

また呪文は虚弱体質の改善や病氣治療のため、あるいはあらゆる地位や職業にある人が生を全うし、かつ繁栄を願うためにも使われたのである。

農村生活と結びついた呪文と呪術の儀式は、農村共同体における独自の規律を伴いながら、豊作、狩猟の成功、喪失した家畜の回復、良好な天気などを保障し、自然災害を回避することを目的としてなされた。19世紀末になってもウクライナでは、飢饉の時、その原因の疑いをかけられた女性たちに対して手足を縛って水中に沈める神盟裁判（ordeal by water）が行われたのはそうした一例である⁽⁴⁹⁾。

商人たちも仕事における成功を願う呪文を持っていた。さらに、兵士たちは傷を癒し、銃の不発を防ぐための特別な呪文を知っていた。

害をなす呪術——「呪い」

有害な呪術（人を害する目的で呪文をかけたり、一服もったりすること）はライヴアルの愛を打ち砕き、敵を傷つけ、あるいは殺害さえするために使われた。1740年、某陸軍大佐の召使いであったイリヤ・チョヴピロは、30年間にわたる「悪魔たちの公」に仕える契約を血で書いたとして訴えられた⁽⁵⁰⁾。1753年、スーズダリ近郊の領地のある農民グループは自分たちの主人を殺害するためにひとかけらの蠟燭に呪文をかけ、床に刺さったナイフの上をとんぼ返りした後、殺害しようとする者のベッド、靴、そして敷居の上に蠟燭をこすりつけた。1815年には、農民ミハイル・チュハレフが彼の徒弟に「しゃっくり」をするように呪文をかけたとして有罪に処せられた。彼は革で編んで作った鞭で35打、および公衆の前での懺悔が命じられたのである⁽⁵¹⁾。

ロシアに限らず世界中どこでも見られるように、呪いをかけようとする人に似せた人形を作るとは同様に行われたし、呪いは下層の人々の間に限ったものでもなかった。後に述べるように、17世紀末、宮廷内に住むすべての人々に向けられた呪文の恐怖は彼らに共通のものであり、ツァーリの家族全員は呪文をかけないとして草や根を持たないことを誓わねばならなかった。またツァーリ・アレクセイの前で行進していた将来の花嫁たちの一人が気を失って倒れた時、呪いにその原因があると囁かれた。1807年4月8日、前述のマーサ・ウィルモトは魔法・呪術に頼る貴族たちについて次のように述べている。「新たな話もまた、マダムS（シチュルベニン）の母、義理の姉、そして私の殺害を、魔法使いと一緒に企ててきたマダムS

について暴露している。強力な魔法が私たちにかけられ、私たちを不和に陥らせ、あるいは私たちの殺害を企てていたというのである」⁽⁵²⁾。

18世紀の有名な事件として、スミリャンスカヤが紹介する宮廷侍従ピョートル・サルティコフ事件がある。1758年、元老院機密局での証言によると、П.И.サルティコフ（1724年頃～96年以降）は冬宮に呪術用の毒草を撒き散らし、エリザヴェータ女帝の寵愛を得ようとした。1796年まで続くこの事件の審問による報告書類はおよそ1000枚にも上ると言われる。迷信家であったサルティコフは家族生活の不幸、特に1751年の結婚後の不幸から、呪術師・魔法使い（волшебники）探しを懸命に行うようになっていた。1754年以降、自分の妻を殺害するために呪術師を探し始めた。その噂を聞いて幾人かの呪術師である農民が彼のもとを訪れた。以上のことは機密局の知るところとなり、調査が始まった。1758年には、機密局での審理のため、サルティコフおよびその家臣と治療師および呪術師との対審が行われた。審理の結果、サルティコフの助力者たちは体刑を受けた後に兵営送り、「呪術師たち（колдуны）」は遠隔地への流刑、「女性呪術師（ведьма）」は女子修道院への永久労働送りとされた。サルティコフ本人に対する決定は、エリザヴェータ女帝の介入により、体刑は免れたものの厳しいものであった。すなわち「死ぬまで監視下に置かれ、ソロヴェツキー修道院へ送られることとなり、その修道院から出てどこへも行くことはならなかった」。しかし1761年、彼は白海に面するソロヴェツキー修道院から自分の領地に帰ることを許された。ただし、厳しい監視の下、そこから一步も出ることは許されなかった。それにもかかわらずサルティコフの呪術・魔法への信念は揺るがず、今度はエカチェリーナ2世の寵愛を得るべく「異端（еретичество）」の力を借りようとした。そのために関係者は今回も機密局の取り調べを受けることになり、1796年までサルティコフ本人は自宅監禁となった。女帝の死後、パーヴェル1世は「以前の侍従サルティコフを監禁から解放し、老齢で病気のあることから息子すなわち3等文官で侍従である〔ヴァシーリー・ペトローヴィチ〕サルティコフの庇護下に置くこと」に署名したのである⁽⁵³⁾。

スミリャンスカヤによると、この事件に対するエカチェリーナ女帝政府の決定はエリザヴェータ女帝時代のそれとは異なっているが、それでもこの決定は「迷信（суеверия）」や呪術に対する政府の対応が1760年代になってもまだ明確ではなかったことを示しているという。この点の検討は次章で行うが、啓蒙思想の精神に基づく判決においては、呪術は「効果のない（недейственное）」、「無分別な（безпутное）」、「実現不可能なペテン行為（несбыточное обманство）」とされ、「『庶民』を誘惑するもの（соблаз «простых людей»）」で、「ばかばかしいたわごと（нелепные басни）」とみなされた。しかしエカチェリーナ2世は前任者と同じく、「呪術」行為を「罪の許し」を求めるべき「背信」行為であるとしたのである⁽⁵⁴⁾。

予言・占い・運勢判断

呪術は予言をする上で大きい力を発揮した。特に女性にとって将来の配偶者を決めるため（いつもというわけではないが）、赤子の性別を占うために、将来の幸福や繁栄、そして何よりも農民にとって死活問題となる天候を占うために使われた。

未来の占いはカード、夢、豆、溶けた蠟燭の形状の解釈、器に入れた水の表面に出来る輪の解釈、煙や炎の形の解釈、鏡の中にイメージを現出させること、特別な音やふと聞いた言葉、奇数と偶数の計算、偶然の出会い、燃え殻あるいは雪の上に残された何かの徴、雌鶏によって啄ばまれた穀物のように動物と関連する神託・宣託、等によって行われた。将来の配偶者に関連する占いは、特に、クリスマスの季節、夏至の頃、セミーク（復活祭後、聖三位一体前の第7木曜日、聖霊降臨の頃。未婚女性の祝日。結婚占いを行い、治療および呪術のための薬草を集める習慣がある）の時期に行われ、多くの農村共同体で夫を選ぶことに限られていた⁽⁵⁵⁾。それゆえ以上のような手段でもって、自分の将来の配偶者のイメージや名前について呪術を使って占うことは動的な社会よりも制約があった。

18世紀以後の史料は新たに生まれる子供たちの性別を予言することに懐疑的である。すなわち、「妊娠した女性がパンを熊に与え、もし熊が怒って唸るならば、彼女は女の子を産む。しかしもし熊が静かなら、男の子を生む」とされたが、実際には飼いならされた熊は民衆の慰みとして使われ、また結婚式に必要なものとされたのである⁽⁵⁶⁾。

民間占いは農民に限った事ではなかったが、以上の行為は農民にとっては天候や経済の変動という重大事態、そして肉体的な生存のためとして感知されうるものの、他の階層にとっては社会的娯楽にすぎなかった。たとえば19世紀半ば、クリスマスの季節のお祭時の占いは商人や貴族の大多数にとって害のない楽しみとなり、外出することの少ない老齢の農村女性にとっては外の世界との繋がりを維持するために大切なものとみなされた。

運勢判断と占いはすべての階層に共通であった。とはいえコーヒーの豆とその出涸らしによる占いはコーヒーを消費する階層である貴族や富裕な商人などに限られていた。ちなみにコルフ島出身でアレクサンドル1世（在位1801-25年）の外務大臣となるヨアンニス・カポディストリアス（1776-1831年、ロシア外相在任1815-22年、ギリシア臨時政府大統領在任1828-31年）はカードとコーヒー・カップで占う95歳のフィン人女性を訪ねている⁽⁵⁷⁾。

1918年以降になって禁止される運勢判断および夢占いの本は1760年代から人々の入手可能となった。これは農民の間でのオーラルな文化が読み書きのできる都市住民や貴族、とりわけ貴婦人にとっても接近し得るようになったことを意味しているのかもしれない。18世紀末、あるイギリス人は、自国も同様であるという指摘をしながら、西欧の観察者には例を見ないほど率直に述べている。「ゴロフキン伯爵の家で、大晦日、彼らはよく行われる迷信の一つで運勢占いのための最初の札出し〔カード遊びの一種〕をしていた。同じ目的のために蠟燭も使っ

た。この夜、彼らはわれわれの間で聖マルコの日（4月25日がこの福音伝道者の祝日）の前後によく見られる他の迷信的な行いを幾つもしたのである」⁽⁵⁸⁾。

第2章 魔法・呪術に対する国家と教会による規制

第1節 17世紀までの法規定：呪術行為に対する世俗権力の介入の始まり

中世ロシアの年代記は、ルーシの初期における呪術師の病的興奮に関するエピソードを伝えている。またキリスト教受容以後、教会は異教との闘いを開始し、呪術を行った者に対する聖俗双方からの動きが活発化するものの、それは一様ではなかった。たとえばキリスト教を受容したウラジーミル大公（在位980-1015年）は呪術を行った者を裁く権限を教会に与えたが⁽⁵⁹⁾、11世紀の府主教イオアン2世（府主教位1080-1088年）は呪術を行った者に対する柔軟な姿勢を見せている。しかし民衆の間では私刑（リンチ）が行われ、嫌疑をかけられた人を焼き殺したり、神盟裁判の意味から手足を縛って水に投げ込んだりした⁽⁶⁰⁾。

16世紀初頭には完成されたとされる『ドモストロイ（家政訓）』では、正教キリスト教徒としての禁忌行為の中に次のようなことが明記されている。「悪魔の歌を歌ったり、太鼓を叩いたり、ラッパを吹いたり、悪魔を喜ばす有りと凡ゆる放埒をなしても少しも畏れない者、魔術、妖術、占星、数字占、十二宮占⁽⁶¹⁾、カラスの〔鳴き〕声占⁽⁶²⁾等を為したりする者、魔法の骨、薬草、根などで人を死なせたり、魔術をかけたりする者、悪魔の言葉や幻映、妖術で信仰を破ぶらせたり、嘘をつかせたり、友人を中傷させようとする者がいたら」（第23章）、そうした者は地獄へ落ちるなどとして警告を発している（第24章）⁽⁶³⁾。

とはいえ1497年（イヴァン3世時代）と1550年（イヴァン4世時代）の『スジェーブニク（法典）』は呪術師および異教信仰についての罰則を含む明確な規定はない。おそらくこの問題がすでに教会法によって規定されていたからであろうし、国家はこの問題に積極的には関わらなかったためであろう。しかし、ライアンによると、モスクワ国家における法——特に1497年と1550年の『スジェーブニク（法典）』および1649年の『ウロジェーニエ（1649年会議法典）』——はビザンツ起源のカノン法（教会規則法）、行政手続き規則、さらにはツァーリ、貴族、その他の民衆との諸関係について述べた政治経済的な表明、以上の混合物であったという⁽⁶⁴⁾。これは聖俗双方の法が混然とした状態で存在していたとの前提に立っての指摘である。

イヴァン4世（在位1533-84年）は当時横行していた呪術の問題に直面して具体的な方策をとったモスクワ国家最初の君主である。彼は1551年の『ストグラフ（百章）会議』で国内の長引く異教信仰に懸念を表明する。『ストグラフ』の中では、「占い師」、「妖術使い」、「魔術師」、「日時を占うもの」などが指摘され、「そのようなあらゆる背信的な誘惑は聖なる教父によって禁じられてきたところである」とし、「今後ともキリストを愛する陛下の帝国にはいつてくる異端は、完全に踏みにじらなければならない」という（第41章第17問）。これ以外にも、『ス

トグラフ』では、「悪魔に魅せられた醜惡な行いをするよう唆す者」に対する注意等が喚起されている（同第 21 問）。また「異端の書物を手にして読んだり、あるいは他の者を惑わしたり教えたりして、それが発覚した者は、敬虔なるツァーリから大いなる怒りをこうむり、主教からは聖なる規則にもとづき永久に破門されるべきである」という（同第 22 問）⁽⁶⁵⁾。かくして教会裁判が扱う事案に「魔術、魔法、妖術、呪術、まじない治療」が含まれることとなった（同 63 章）⁽⁶⁶⁾。結局のところ、すべての呪術行為は悪魔に仕えることであり、神はこれを禁じているとしたのである（同 93 章）⁽⁶⁷⁾。

北ロシアの自由農民（черносошные）に対する裁判のための 1589 年法は、魔法使い（ведунья, ある版によると ведьма）について言及しているものの、それは様々なカテゴリーの住民の「名誉に対する侮辱（бесчестие）」を補償する程度を明記するという文脈においてのみであった。なお彼らは売春婦（блядь）と同じくリストの最後に位置づけられた⁽⁶⁸⁾。

ボリス・ゴドゥノフ（在位 1598-1605 年）は全ての臣下に、ツァーリやその家族に対して食べ物・飲み物・衣服その他を通じて呪いをかけないこと、呪術師を使って悪事を働かないこと、足跡や風を使って呪いをかけないこと、さらには以上のような行為がなされたと知った場合は直ちにツァーリに報告することを誓わせた⁽⁶⁹⁾。

17 世紀を通じて上の傾向は継承された。呪術は聖俗双方の当局から注視され、聖界からは告解（懺悔）と説教のなかでしばしばそれらを問題にしていた。アレクセイ・ミハイロヴィチによる一連の布告は異教崇拜、占い、草木による治癒を含む呪術に関連するすべての実践を法の埒外に置き、呪術を行う者を厳しく罰することを命じている（前節で指摘したアレクセイ本人の行動とは異なるが、それを「矛盾」と考えてはならないであろう）。1648 年の法令は、呪術師を鞭で打つこと、呪術を繰り返した者に対して死刑を定めている⁽⁷⁰⁾。

ロシア最初の全国法典『ウロジェーニエ（1649 年会議法典）』では、神を冒瀆する者および教会の秩序を乱す者について次の様に規定している。「いかなる信仰であれ正教徒にあらざる者が、あるいはロシア人が、主なる神とわれらが救世主イエス・キリストを、あるいはイエスを生みし、いと浄きわれらが女宰たる聖母にして永遠の乙女マリアを、あるいは聖なる十字架を、あるいは神にかなう聖人たちを冒瀆した場合。それについて、あらゆる方法で嚴重に取り調べること。そして、取り調べた上でそれがたしかに立証された場合には、その瀆神者の罪を明らかにした上で、火刑によって処刑すること」と明記している。1653 年、新たな法令では罰則として火刑が規定された⁽⁷¹⁾。次のフォードル 3 世（アレクセイヴィチ、在位 1676-82 年）治世下の 1682 年にも嚴罰の規定が繰り返されている⁽⁷²⁾。

第2節 18世紀の法規定：世俗権力の呪術行為に対する本格的闘争とその後の揺れ動き ピョートル時代

18世紀の法規定は呪術問題が世俗権力の管轄下に移行するものの複雑な過程を示している。国家と社会の西欧化＝近代化を目指すピョートル1世（在位1682-1725年）の時代、『陸軍操典（Воинский устав）』（1715年4月26日印刷，1716年3月30日承認）と『海軍操典（Морской устав）』（1720年）が呪術，キリスト教への不信心，神に対する冒瀆，などの問題について明確に述べている。

『陸軍操典』では，軍人には呪術（чернокнижество）が禁止され，それを行った者は死を持って罰せられるとある。しかし死刑を適応するためには，法律で「彼が自らの呪術によって誰かに害をなし，あるいは実際に悪魔と契約を結んでいることが」明らかであることが求められている。また「もし軍人の中に偶像崇拜者（идолопоклонник），呪術師（чернокнижец），武器に呪文をかける者（ружья заговаритель），迷信を信じる者（суеверный），瀆神の魔法使い（богохульный чародей）がいれば，その者は…列間答刑（шпицрутен）に追いやられ，あるいは火刑に処されるべし（весьма сожжен имеет быть）」（『陸軍操典』第1章第1条）⁽⁷³⁾，とある。しかも上記のような規定はロシアだけに限ったことではなかったのである⁽⁷⁴⁾。

『海軍操典』では，「誰であれ，神を冒瀆し，またその名を軽視し，神への奉仕を謗り，神の言葉と聖なる機密（秘跡のこと一筆者）に悪口雑言を吐く者は，これらのことを酔ってなしたか素面でなしたかに関わりなく，はなはだしく露見した場合，舌を灼熱に熱した鉄でもって焼き，その後で首をはねる」（『海軍操典』第4巻第1章第2条），と規定している。また，「誰であれ，いと淨き聖母，諸聖人，聖なる教会の言い伝えと法規に悪口雑言を吐く者は，その人物がどのような身分であり，またどのような悪罵をなしたかを見極めた上で，悪罵の度合いに応じて，体刑による懲罰，あるいは死刑に処す」（『海軍操典』第4巻第1章第3条）。さらに，「もし悪罵する者の言葉が何ら瀆神の内容を持っておらず，ただその無分別からそれがなされたのであれば，それが1度目ならば，犯かした者に対して，それが将校の場合には犯行の重要性に応じて俸給の控除をもって処罰する。兵卒の場合には猫皮で厳しく打たれる。もし再び繰り返すようなことがあれば，懲罰は幾度も行われる。その者は公開の場で教会の告解（懺悔）をしなければならない。もし三度繰り返す場合には銃殺される」（『海軍操典』第4巻第1章第5条）⁽⁷⁵⁾，と規定されている。文面からでは呪術について言及していないように見えるが，「神への冒瀆」のなかには呪術行為が含まれていると考えられる。

続く教会改革のための『聖職者規則（Духовный Регламент）』（1721年）では，宗教に対する冒瀆の罪ではなく，騙されやすい者に対する詐欺として魔法や呪術が非難された⁽⁷⁶⁾。翌1722年の布告により，「瀆神（богохульные）」，「異端（еретические）」，「分離派（раскольные）」，「魔法（волшебные）」という犯罪は，宗務院の宗教裁判所が所管する「宗教問題（дела духовные）」

として明瞭に区別された。しかしそれらの問題は、元老院指揮下にあるプレオブラジェンスキー官署、機密局、捜査官署といったいわば世俗権力の調査機関も担当した⁽⁷⁷⁾。

上記の「犯罪」が法律に記載されるようになった背景には、疑いなく18世紀の呪術に関する裁判件数が17世紀のそれをはるかに凌駕していたという事実があげられる⁽⁷⁸⁾。

ラヴローフの研究によると、1721年、呪術師に関する宗務院が扱う審理は6件であり、1722-25年には年間2~5件の間を推移していた。こうした裁判件数の高まりにも拘らず、実際の判決は極刑を求めることはなかった。この背景には、現実の状況を認めるウクライナの法的伝統と結びつき、かつ専門知識を持ったウクライナ聖界の影響があった。彼らはウクライナにおける呪術師裁判にも慣れており、それらを世俗の裁判として審理し、そうしたことをロシアの土壌に移すことを厭わなかったのである⁽⁷⁹⁾。

ピョートル1世からアンナ女帝・エリザヴェータ女帝時代へ

ピョートル1世の魔法や呪術に対する厳しい規定はその後も継承されたが、若干の変更も見られた。アンナ女帝時代の1731年5月25日、呪術を行った者に対しては火刑による極刑に臨むものの、元老院は呪術師をペテン師として判決を下すことを命じている。

布告は次のように謳っている。「以下のことが女帝陛下の知れるところとなった。ロシアにおいて、ある人々は悪事に対する神の怒りと永劫の苦しみを忘れ、あたかも自分は幾つもの呪術（волшебства）を知っているかのように見せ、庶民（простые люди）にあらゆる手段を尽くすと約束している。それがために庶民は自らの家に彼らを招き入れ、自らの悪巧みへの助力を彼らにお願いしている。そのような偽りの呪術師（мнимые волшебники）は彼らにそれを行うことを約束し、それがために彼らは少なからざる利益を得ているのである。しかし、そうした彼らの悪意をなす手段へと魅了するものは徒に自らに損害をもたらすのである。より正しく言えば、神の怒りを招くのである。世俗の法に従って処罰され、言い換えれば罪に応じて処刑されるのである。それゆえ、女帝陛下の布告に従い、元老院は以下のように命令を下した。上記の点に関して、全ロシア帝国において、元老院から印刷された布告が発布されるべきこと。それは、今後、なん人もいかなる偽りの呪術師をも公然とまたこっそりと家に招き入れることなく、〔偽りの呪術師が〕やって来ることもなく、道々彼らと呪術について話し合うこともなく、またいかなる悪意をなす彼らの教説を習うことがないようにするためである。もし、今後、誰かが、神の怒りに慄かず、女帝陛下のこの布告を恐れず、何かしら呪術の手段のために呪術師を自分のもとに呼び入れ、あるいは〔偽りの呪術師が〕彼らの家に行き、あるいは道々彼らと呪術について話をし、彼らの教説に従い、あるいはそのような呪術師が自身で害をなし、あるいは誰かのために呪術を行ったことが明らかとなったならば、その場合には、当該のペテン師ども（обманщики）は死をもって処罰される。すなわち火刑に処せられるものとする。偽り

の悪意のために彼らに要求する人々には厳しい罰則すなわち鞭打ち、あるいは罪の重さに応じて死刑が科される。もし当該のペテン師がそのような不信心（богомерские дела）を自分自身のために行い、他の誰からの密告もなくして自分の罪を自ら明らかにする場合、その罪はいかなる拷問をも行うことなく赦免されるものとする」⁽⁸⁰⁾。

上記の布告をどのように解釈するかについて様々な意見があるが、A. C. ラヴローフによると大きく分けて2つの相反する見解があるという。まず第1は、この布告が処罰の厳格さを求めているとする見方である。たとえばH. H. ポクロフスキーは、もっぱらこの布告に「呪術はペテン師によって庶民を騙す詐欺であるという啓蒙主義的理念」を見る⁽⁸¹⁾。E. B. スミリャンスカヤも同様に、法典における合理的思想の影響の現れであるとする。彼女によると、それ以前にフランスで発布された布告と異なり、これが「魔女（ведьма）」や民衆の呪術信仰に対する政府や教会の迫害の廃止を意味するのではなく、反対に迫害が広範囲に促進されたという⁽⁸²⁾。第2は、処罰の軽減を求めているという考え方である。この立場に立つラヴローフは、革命前の研究者A. レヴェンスチムの見解に依拠しつつ、布告は『陸軍操典』の条項の諸条件（悪魔との契約および害を与えることを証明すること）について沈黙しているとする。この布告によると、「民衆を根や囁きによって治療する、農村それぞれの治療師（знахарь）は、火刑に処せられたかもしれない」のである。しかし同時に、この布告は宗務院の求める教会での告解に代わり、鞭打ちの導入が処罰の軽減を雄弁に物語っているという（とはいえ鞭打ちは体力のない人にとっては事実上の死を意味していた）⁽⁸³⁾。さらにより重要なのは、この布告の発行部数が多く、主教管区に広く普及したことである。かくして告発する側とされる側双方に、上記の布告は影響を与え、呪術は禁止されているという意識を植え付けることになった⁽⁸⁴⁾。

さらにラヴローフの研究を利用すると、1732-40年において、呪術師として訴追された40件のうち15件に1731年の布告の引用が見られるという（それらを含めて16件だけが法的裏付けのため法律を引用している）。この期間は呪術師を集中的に告発した時期であった。その背景にはビロン体制（бионовщина）という政治的問題があった可能性は否定できないが、それでもって1739・40年にその件数が極端に減少する（1件）理由をすべて説明することはできない。あるいは宗務院副院長を務めたフェオファン・プロコポーヴィチの死（1736年）が呪術師告発に対する宗務院の立場を変化させた可能性も否定できない。なおロシアにおける最後の呪術師の処刑は、1736年、カザン県官房の決定によってなされたシンビルスクのポサード民ヤーコヴ・ヤーロフに対するものである。実は、宗務院は適宜この事件について情報を得ていたとは言い難く、やっと1740年になってヤーロフの生命を奪うことはない提案したが、時すでに遅かったのである⁽⁸⁵⁾。この点については本稿第4章第2節で検討する。

エリザヴェータ女帝（在位1741-61年）時代もアンナ女帝の1731年布告に従って呪術師を裁き続けた。すなわちエリザヴェータ女帝は、「魔法使い（чародеи）が根、草、その他によっ

て「他の者を」害する」場合にのみ死刑を認めつつも、単なる「(呪文の) 囁き (шептание)」に対しては鞭あるいは笞 (плети или батоги) による刑罰を命じるのみである⁽⁸⁶⁾。アンナ女帝からエリザヴェータ女帝に至る 1731-61 年の 30 年間は呪術問題に関する裁判件数が最大となった時代でもあった。実際、18 世紀に行われた 240 件の裁判審理のうちほぼ 150 件がこの時代に集中していたのである⁽⁸⁷⁾。

エカチェリーナ女帝の時代

エカチェリーナ 2 世 (在位 1762-96 年) 時代に明確な変化が見られた。1762 年 10 月 8 日の元老院布告は「悪霊にとり憑かれた女たち (кликуши)」を自称する者に対する懲罰について述べている⁽⁸⁸⁾。さらに女帝は「法典編纂委員会」に宛てた「大訓令」のなかで、異教に対して宗教寛容で臨むように勧めてはいるものの、「呪術〔魔法〕および異端に関する事案の審理については非常に慎重にしなければならない」と指摘する⁽⁸⁹⁾。1770 年 3 月 14 日の元老院布告は、啓蒙思想の影響もあって、呪術を重罪としての極刑からペテン行為にふさわしいより軽い刑罰の対象とした⁽⁹⁰⁾。これに関連して、1772 年 10 月 26 日の宗務院布告は、主教管区の主教および聖職者に対して呪術師 (「ペテン師」) に関する事件の「調査」を禁止した。以後、「ペテン師」の問題を「宗教的」問題としては審理せず、世俗当局の管轄下に置くとしている。これ以外に、異なる信仰に対する世俗の監督は 1774 年 12 月 19 日付「百人長とその同僚たちに与える指令」の中でも、アンナ女帝の 1731 年布告の文言を繰り返しながら確認されている⁽⁹¹⁾。

1775 年 11 月 7 日、エカチェリーナ 2 世は地方行政改革令 (「全ロシア帝国の県行政に関する基本法令」) を発布し、その中でいわゆる良心裁判所 (совестные суды, 法文によらず正義に基づく裁判およびその裁判所) の創設を求めた (第 26 章「良心裁判所について」)。この裁判所は民衆の迷信 (呪術を含む)、未成年者の犯罪、および精神病的犯罪等を所管した⁽⁹²⁾。しかし実際には、地方の裁判所などでは呪術行為を行った者に対しては死刑でもって臨み、さらには私刑も行われていた⁽⁹³⁾。民衆の迷信に関わる事件の中で、最も頻繁に良心裁判所に懸けられた事案は「悪霊にとり憑かれた女」に関わるものであった。教会でのミサの最中、彼らは自らに取り憑いた者の名を叫びながらヒステリックにわめき散らした⁽⁹⁴⁾。時にこうした「悪霊にとり憑かれた女」に対する告発は多くの無罪の人たちをも巻き込むことになった。たとえば時代は遡るが、1670 年、約 70 名の「悪霊にとり憑かれた女」が見境もなく告発されてシェーヤの町を事実上恐怖に陥れた。その結果、地方当局はツァーリに援助を求める事態にまで至ったのである⁽⁹⁵⁾。

「教区規定 (Устав Благочиния)」あるいは「警察規定 (Устав Полицейский)」が発せられた 1782 年までに、呪術と迷信に関する問題を含む事案は宗教裁判所の活動領域から除外されて刑事事件 (уголовные) とみなされ、世俗の最高審の決定に委ねられた⁽⁹⁶⁾。

第3節 18世紀の宗務院記録にみる諸事件

18世紀の前半だけで宗務院は60以上の「魔法・呪術と迷信」に関する事件を扱い、下級聖職者裁判所および世俗の犯罪裁判所が処理した事案は数百に上るという⁽⁹⁷⁾。1716年の主教宣誓に際して、すべての主教は魔法や迷信が彼らの管区で行われていないことを誓わねばならなかった。それは1721年のピョートルの『聖職者規則』の中でも述べられ、1737年のアンナ女帝の布告によって強化されたが、もしそれを怠るなら裁判にかけるとの脅しをうけて、すべての主教と大修道院長は管区内での魔法・呪術と迷信、偽の奇跡、「悪霊にとり憑かれた女」などに関するいかなる事件についても宗務院に年2回の報告を行う義務を負ったのである⁽⁹⁸⁾。

すでに述べた敬虔ではあるがナイーブなスーズダリの主教ポルフィーリーは、報告書のなかで、特に誕生と結婚に対する呪い、および有害な「黒」魔術（«черная» вредносная магия）が広まる傾向に直面し、彼自身の身内の者に対してさえそれに立ち向かうことができないと絶望して述べている（本稿第1章第1節も参照）。しかしほとんどの主教たちは賢明にもどこにでもみられるそうした民間の習慣を見て見ぬふりをし、管区内ではすべてがうまくいっているとどっち付かずの報告を書き送っていたのである⁽⁹⁹⁾。

18世紀の宗務院の管轄する教会裁判から幾つか特徴的な事件を拾ってみよう。ピョートル治世晩年の1723年、ヴィボルグ連隊の退役兵士イヴァン・クラスコフが「怪しい」冊子や手紙、木製の占い用サイコロ、草および根を所有しているのが露顕した。尋問で、彼はペテルブルクのヴァシーリー島でそれらの資料を見つけ、またサイコロは兵士でもある彼の甥から譲り受けたと述べた。彼はそれを2年にわたり彼自身の家族の必要のため、健康および死期を占うために使ってきたが、その技を馬医者である従弟から学び、他の誰のためにも、また未来を占ったこともなかった。薬草も同様に彼自身のためにのみ使った。彼は、『陸軍操典』で禁じられている武器に魔法の呪いをかけたこと、悪魔と語り合ったこと、偶像を崇拝したこと、神を冒瀆したこと、呪術・魔術を行ったことについては否定した。連隊の軍医は、草と根は純粹に医学的に価値のあるもので害をなす呪術・魔術を行うには何ら効果のないものであることを証明した。それにもかかわらず、イヴァンには列間答刑6回と公開での告解（懺悔）の判決が下されたのである⁽¹⁰⁰⁾。

1723年、20歳になるヴァシーリーと名乗る「偽の聖なる愚者（ユロージヴィー）」が、殺人や強姦を犯し、古儀式派風に2本指で十字を切ったこと、異端（文字どおりには異端信仰であるが、おそらくは魔法を行ったこと）、指揮下にヘロデと呼ぶ悪魔を長とする悪魔たちをもっていること、水車を動かなくさせたこと（悪魔たちが水車用の導水路に住んでいると考えられたから、機械がうまく動かないのは魔法使いのせいとされた）、またギリシア、トルコ、スウェーデンから財宝を持ってくるために悪魔を使ったこと、以上の廉で告訴された。宗務院は、彼が「魔法使いであるとして、また悪魔たちを持っているとして」法務参議会に照会した⁽¹⁰¹⁾。

アンナ女帝時代の 1731 年、チェルニーゴフ主教座聖堂の輔祭ステファン・コジミンが悪魔を呼び出す方法を含む呪術・魔法の書物を所有しているとして告発された。その書物によると、十字架を取って、それを右足の踵で踏み潰し、ベルトをはずし、キリスト、聖母マリア、十二使徒教会、十二使徒、教会の 12 の大祝日、そして自らの両親、以上を否認しなければならないとされているのである。チェレミス、クリミア、ザクセン（！）から呼び出された悪魔たち、およびその他の外国からの悪魔たちは、ヴェリガー、ハズ、ヘロデ、アスピド、バシリスク、エナレイ、セミョーン、インディクおよびハレイという名前である。呪文の一つは「ヴァルラアム、ヴァルゲルそしてガリレイ（！）よ、神エヌの召使いの病気を治したまえ。アーメン、アーメン、アーメン」⁽¹⁰²⁾であった。

1740 年、すでに述べたイリヤ・チョヴピロは（本稿第 1 章第 1 節参照）、30 年間にわたり「悪魔たちの公」に仕える契約を血で書いたとして訴えられた。然るべき書式（モスクワ国家の請願書で使用された法的書式が呪いでは普通に利用された）で書かれた契約書が証拠として提出された⁽¹⁰³⁾。

エカチェリーナ 2 世の 1770 年、アルタイ地方の国有地農民アルテミー・サカロフは古儀式派教徒であるとの疑いで捕えられ、「君主の一大事（слово и дело）」の手続きの下告発された。教会裁判所における尋問の後、政治的犯罪に関する調査のためにシベリアの地方官房に送られた。そこで告発には何も根拠がないことが分かったにも関わらず、審理は教会裁判所へ戻されることになった。というのも、調査によって、彼が訴えられた罪状のリストの中で一連の宗教的犯罪が注目されたからである。それらは、強盗、殺人、放火、教会や異端の墓からの略奪、悪魔との取引、悪魔（彼は悪魔を父と呼んだ）と古代スラヴのペルーン（スラヴの雷神であるが、当時の宮廷ではユダヤ的な異教神とみなされた）、ヴィホール、そしてコリャダーの 3 神に懇願することで魔法の呪文をかけたことを含んでいた。彼はまた夢を占い、その占いのために豆と詩編を使ったとされたのである⁽¹⁰⁴⁾。

以上は、呪術の問題を聖界当局がどのように認識していたかを示す事例である。最後の例がよく示しているように、古儀式派教徒として逮捕された場合もあるし、あるいは異端の嫌疑をかけられた場合もあり、呪術問題は決して単純に割り切れる問題ではない。とはいえ宗教裁判所の管轄はやはり主に宗教問題であったことが分かる。

第 3 章 シンビルスクの「呪術師（魔法使い）」ヤーロフの事件

事件の発端あるいは妻の「密告」

ヤーロフ事件の起訴前の取調べはアンナ女帝即位後 1 年半ほど経った 1732 年 8 月 5 日にシンビルスクで開始され、1736 年 3 月 18 日に結審した。その間ペテルブルクの元老院と宗務院はお互いに審理の経過を静観していた。まず事件の概要を述べるとしよう。

1732年8月5日、シムビルスク市役所（Ратуша）⁽¹⁰⁵⁾に自らをシンビルスクのポサート民ヤーコヴ・ヤーロフの妻ヴァルヴァーラ・ペトロヴァと名乗る婦人が現れた。市役所での尋問のなかで、彼女は役人を前にして彼らがすぐには信じることができないような自分の夫に関する話を語り始めた。しかしヴァルヴァーラが自分の証言を話し始めると、役人たちは彼女の言うことを信じ、彼女がヤーロフについて知っていることをすべて、さらにはヤーロフについて知っていることを残らず話すように命じた⁽¹⁰⁶⁾。

ヴァルヴァーラの話によると、1732年2月4日、彼女はヤーロフのもとに嫁いだ。結婚当初、彼女はヤーロフの様子について気付くことはなかったが、時が経てば経つほど、夫は謎めいて奇妙な行動をとるようになった。毎日、暗くなり始めるや、ヤーロフはもう自分の「屋根裏部屋に（на подвлокне）」閉じこもっている。彼女はこっそりと夫のいる部屋の壁まで近づき壁に耳をあてたり、ヤーロフが「異端の書（еретические книги）」によって魔法を行っていることを注意して見ていた。このことはヤーロフの心に極めて強い印象を与えた。まさにこうしたことのために、彼女はまず初めには聖神女昇天教会の自分の霊的（духовный）神父〔すなわち懺悔聴聞司祭〕ニキータ・アンドレーエフに相談し、その後、同じく神父のニキフォル・エピファーノフに相談した。つまり「彼女の夫が異端の書を所有していることを話したのである。兩人とも彼女がそこにとどまっているのはふさわしくなく、彼女の夫ヤーロフを捜査するためにシンビルスク市役所に行く〔訴え出る〕ことが適当であるとした」⁽¹⁰⁷⁾。

ヴァルヴァーラの「密告（извет）」の真偽を確かめつつ、市役所における彼女の証言はこうして終わっている。そこに真理の一端が潜んでいることを市役所の役人たちは確信したのである。

逮 捕

他日、捜査のために、また妻の報告の真偽を確かめるために、地区の長老（земский староста）であるセミョーン・ヤスィリンとその「補佐役たち（с товарищи）」が派遣された。指定された場所に着くと、差し向けられた人々は、ヤーロフが秘密の業を行っている真最中に彼を取り押さえた。以下はその顛末である。

派遣された人々は彼の家の上階にある屋根裏部屋へ向かい、ヤーロフが何をしているのかを、またほの暗い灯りのもとで皆の前に興味深い光景が広がっているのを目にした。すなわち、彼らは「淫蕩へと導く偽りの呪文の書が網籠の中の穀物の粉に埋もれている状態を、また少ないが古い様々な根、占いの手帳（тетрадки гадательные）、彼ヤーロフ自身の書付（письма руки его）、あらゆる種類の乾燥させた草、手もみの草、手でもまれていない草（всякие разные травы сушеные и тертые и не тертые）、手順書（букварь）およびその他の書付（письма）を発見した」⁽¹⁰⁸⁾。ヤーロフ自身の周りには「人骨（кости человеческие）」が並べられていた⁽¹⁰⁹⁾。

ヤーロフがどこに何を隠すのかを十分見届け、記憶にとどめ、彼が呪術を行い始めたまさにそのとき、派遣された人々は屋根裏部屋へ押し入ったのである。ヤーロフを縛り、見つけ出すことができたものすべて、および呪術行為にとって意味があると皆が認めたものすべてを押収した。物的証拠を積み込んだ大きな籠とともに、ヤーロフは市役所の役人たちの前に連行されてきた。ここですべての取り調べに際して、役人たちはヤーロフに「異端（еретичество）である」と自白させようとした。そのために彼を拷問し、「答で打ちすえ（бьют бато́гом）」、彼が話すことすべてが「尋問（допрос）」で直に書き留められることになったのである。

証言

ヤーロフは次のように証言した。「その異端の書を彼は9年前から所有している」。「まさにこの不可思議な書に従って、彼は常々あらゆる行為〔呪術一筆者〕を行った」。彼がその書を研究した後、それによって、彼は「すべての創造主である真実なる神（Всесо́звездный Исти́нный Бог）」を否認し、決してキリストを認めようとはしなかった。この教えにより、彼は「悪魔とサタンを君主とし、他の異端者であるディオニーシイとヴァルラアミイ〔ヴァルラアム〕を師とし、自らを彼らの奴隷とみなし、言葉でもそのように呼んだ。彼は悪魔の意思に従うと誓った。彼はその書に書かれていることをすべて話した」⁽¹¹⁰⁾。このディオニーシイとヴァルラアムについては本稿第4章で述べる。

さらにヤーロフ自身は次のように語り続けた。彼は「そのような異端の書を」たまたま見つけた。「その書の助けにより、どのようなものであれ彼が望むものに対して放蕩へ向かう己の力を示すことを学んだ」。しかし彼の母親と妻は彼のそのような魔法についてまったく知らなかった。ただ、彼は一度ならず自分の懺悔聴聞神父であるニキータ・アンドレーエフに「神を否認する」という「過ちを認めざるを」得なかった⁽¹¹¹⁾。とはいえ、呪術師（魔法使い）についての布告発布⁽¹¹²⁾後、ヤーロフは「自分の家で魔法（呪術）を行うことを」まったく止め、「草と根についてだけ学び」始めたのである、と。

こうした自白の後、ヤーロフに対して妻との対審が行われた。その際、ヴァルヴァーラ・ペトローヴァ・ヤーロヴァは以前の通り、自分の意見を変えずに次のように述べた。彼女は「自分の夫が異端であると気付いていた」⁽¹¹³⁾、と。

調査

シンビルスク市役所は以上の点だけで結論に達するべきではないと考えた。むしろ反対に、ヤーロフ自身と彼の妻の双方の証言を考慮に入れるべきであるとした。

他方、カザンの上級聖職者官署（Архиерейский Духовный Приказ）ではニキータ・アンドレーエフ神父に対する尋問が行われた。そこで彼はヤーロフの証言を完全に否定したうえで次のよ

うに補足した。「以前にも、またその後も」、ヤーロフは神父のところに「懺悔のためにやって来たことはなく、自ら異端という点に彼にはその過ちを認めたこともなく、また聖餐にあずかったことさえなかった」。このことは別のニキーフォル・エリファーンフ神父も認めている⁽¹¹⁴⁾。

当局は手段を尽くしてヤーロフの呪術行為と少なくとも直接的に関係する人物について情報を得ようとした。上級聖職者国庫官署（Архиерейский Казенный Приказ）では次のことが分かった。1730年、彼はシンビルスクで多くの「病める者たち」を治療したが、それは自分の個人的な欲求からだけではなく、シンビルスクのボサート民自身の懇願によるものでもあった。ピョートル・カラームィシェフおよびその弟のガヴリール、イヴァン・イズジェベルスキイ、その嫁であるマリア・イヴァーノヴァ、グリゴリー・デレヴァーギン、その他である。これ以外にも、ヤーロフが「無分別から（от безумия）」「治療した（врачевал）」人々がいた。尋問にあたって、上で述べた証人たちは異口同音に次のように証言した。ヤーロフは彼らの様々な病気を治した。このことは彼らだけに知られているのではなく、「彼らよりも地位の高い（важнее их）」他の人々も知っているのである⁽¹¹⁵⁾。

また、ヤーロフの研究、異端の書および魔法・呪術について、上記シンビルスクのボサード民たちは聊かもヤーロフについて疑念を抱いてはいなかった。反対に、彼らにとってヤーロフは「信心深く（богобоязненный）」、かつ善良な人であった。治療に際してヤーロフは洗礼式における祈禱書に印刷されている悪魔と悪霊への崇拜を禁ずる3つの祈りを唱えた。これらの証言がヤーロフに伝えられると、突如、彼はプロートニコフと呼ばれるそのような「秘密の呪術治療師（ворожец тайного）」を知っていると言い出した。「己の呪術が何であるのか、彼は実際のところ知らない」、というのである。他の「有害な異端者（зловредный еретик）」（＝プロートニコフ）に対するヤーロフの与えたヒントのおかげで、役人たちは彼を調べる手段や方法を得た。しかしシンビルスクの住人のうち誰もこのプロートニコフを知る者はいなかった。シンビルスク市役所がヤーロフの審理を終え、すべての記録文書がまずは〔カザン県〕地方長官行政官房（канцелярия Воеводского Правления）に、その後、下位機関であるシンビルスク郡官房（канцелярия Симбирской Провинции）に引き継がれた。ここでわれわれは次のことを知ることになる。自らの証言を異口同音に繰り返す証人たちすべてが再尋問され、彼らは「ヤーロフが神を冒瀆し異端の行いをするを目にすることなく、治療師として彼に懇願して、彼の診察を受け、彼が調合したまさにその草を飲み、かくしてそうした草のおかげで彼らはいつも痛みなどを和らげていたのである」。ヤーロフに対しては、特に治療師「プロートニコフ」に関して幾つか質問され、これについて彼がすべてを説明するよう答で打ちすえられた。ヤーロフは「長いこと自説〔治療師プロートニコフを知っているということ〕を曲げなかったが」、最後には拷問に耐え切れず自らの証言を覆した。ヤーロフは「プロートニコフに無実の罪を着せ」、「プロートニコフには罪はない（вполне очистил Плотникова）」、と述べたのである⁽¹¹⁶⁾。

捜査の終了、判決、そして処刑

ここに至り「異端者」ヤーロフについての全捜査が終了した。彼を告訴するためのすべての証拠が〔シンビルスク郡官房から〕カザン県地方長官行政官房に最終審理のために提出された。そこでは不可解なもの、およびこの事件がもつ様々な問題点には注意が払われることなく、彼のすべての行いはヤーロフの罪として明確に異端者の見解によるものとされたのである。カザン県官房は『ウロジェーニエ（1649年会議法典）』第1章第1条、および1731年5月20日付アンナ女帝の勅令⁽¹¹⁷⁾に従って、「呪術師（あるいは魔法使い волшебник）ヤーロフは彼のなした他人に恐怖を懷かせた嘘と背信の行為に対して、火刑による死を持って処刑される」ことを決定した。結審した1736年3月18日、ヤーロフの処刑が公開で行われた。「何となれば、当該のヤーロフは尋問において、すべての創造主である神を否認したこと、自らが異端であること、そのことを懺悔聴聞司祭に懺悔し、聖餐を受けたからである」。しかし「彼ヤーロフは処刑の終了まで邪悪の中にいたことは明らかである」⁽¹¹⁸⁾。以上のことすべてについて、カザン県地方長官行政官房は元老院に急ぎ報告した。

第4章 事件をめぐる国家・教会・社会

第1節 当局の動向

文書作成の経緯

現存する史料から、当局はどのように事件を認識していたのだろうか。まずは史料の束を紐解いてみることから始めよう。

元老院文書は「（文書番号4514番一以下同じ）1740年11月22日、機密局に従い、提出することが書き留められた。カザン県官房から元老院宛て。非常後備軍命令の報告」（РГАДА. Ф. 248. Ед. Хр. 792. Л. 30. Л. 1123-1125）である。他方、宗務院に集められている史料は、綴じられている順に、まず1740年7月16日に書き留められた「（2769番）1740年7月16日に読み上げられた元老院から宗務院宛て文書」（РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Л. 328. Л. 1）があり、そのあとに「（30番）1734年11月9日の日付のあるカザン県から元老院宛て報告書」（Там же. Л. 2-5о6.）が続く。これは事件の経緯ならびに裁判尋問過程でのヤーロフの陳述が第1の史料よりも詳しく述べられている。日付のない「（文書番号なし）瀆神者ヤーコヴ・ヤーロフについて。カザン県から元老院宛て報告抜粋」（Там же. Л. 6-7）は量刑について元老院への照会が主である。1740年7月31日に署名された「（159番）1740年7月30日に書き留められた宗務院の議事録」（Там же. Л. 8-9о6.）、「（2351番）全ロシアの専制君主にして皇帝陛下の布告、宗務院からカザンとスヴィヤシスクの府主教宛て」（Там же. Л. 9）、「（2352番）カザン県官房宛て布告」（Там же. Л. 9-9о6.）, 1740年9月23日に提出された「（3867番）1740年8月27日と日付のある宗務院宛てへの報告」（Там же. Л. 10）, 1740年10月23日に提出された「（4344番）

カザン県官房から宗務院宛て。非常後備軍命令の報告」(Там же. Л. 11-13об.), 1740 年 11 月 25 日に提出された「(4839 番) 1740 年 10 月 14 日の日付がある宗務院宛て報告」(Там же. Л. 14-15), と続く。

文書番号は元老院と宗務院の 2 方向から付されており, その番号により作成された順序が分かる。元老院文書(4514 番)は宗務院に集められていた文書のうち文書番号(元老院文書番号であろう)4344 番と 4839 番の間にくるものであろうし, 内容的には 4344 番と 4514 番は重なる。ただし, 4344 番はカザン県官房から宗務院宛てであるのに対して, 4514 番はカザン県官房から元老院宛てである。また 4514 番に出てくる「6209 番と付された 7 月 17 日付の写し」とは何か不明のままである。すなわちすべての関係文書が現存しているわけではないと考えられる(あるいは別の文書群にまぎれているとも考えられる)。

以上の点を考慮し, かつ当時の裁判・尋問の執行の様子からして, 文書は地方から中央官庁へと上がる手順を踏んでいたことが分かる。すなわちシンビルスク郡官房からカザン県官房, そしてカザン県官房から元老院という地方から中央へという流れである。聖界においてもそうである。

裁判・審理の経緯

上述の史料を年代順に並べてみると次のようになろう。①「(30 番) 1734 年 11 月 9 日の日付のあるカザン県から元老院宛て報告書」, ②「(文書番号なし) 瀆神者ヤーコフ・ヤーロフについて。カザン県から元老院宛て報告抜粋(日付なし)」, ③「(159 番) 1740 年 7 月 30 日に書き留められた宗務院の議事録」, ④「(2351 番) 全ロシアの専制君主にして皇帝陛下の布告, 宗務院からカザンとスヴィヤシスクの府主教宛て」, ⑤「(2352 番) カザン県官房宛て布告」, ⑥「(2769 番) 1740 年 7 月 16 日に読み上げられた元老院から宗務院宛て文書」, ⑦「(3867 番) 1740 年 8 月 27 日と日付のある宗務院宛てへの報告」, ⑧「(4344 番) カザン県官房から宗務院宛て。非常後備軍命令の報告」, ⑨「(4514 番—以下同じ) 1740 年 11 月 22 日, 機密局に従い, 提出することが書き留められた。カザン県官房から元老院宛て。非常後備軍命令の報告」, ⑩「(4839 番) 1740 年 10 月 14 日の日付がある宗務院宛て報告」, 以上である。

すでに述べたように, 現存しない史料もありそうなので, 以上が当該テーマに関する全史料というわけではないかもしれない。それにもかかわらず, 史料内容の重複から, 詳細な事件・裁判内容を知ることができる。その概要は前章で述べたとおりである。ただし注意すべきは, 近世ロシアにおけるすべての裁判がそうであったように, 通常 3 度の拷問による自白を証拠の第 1 条件としていることである。また記録は書記官の手によるため, ヤーロフの発言は 3 人称となっている。さらには告発する側とされる側の対審がおこなわれている。以上が留意すべき点である。

裁判の経緯については聖俗双方が注目していた。具体的かつ主な審理はカザン県官房で行われたが、そこでの報告はペテルブルクにある元老院へも宗務院へも送付されている。しかもそれぞれの下部機関にも検討させている。元老院であれば機密局へ、宗務院であればカザンとスヴィヤシスクの府主教（座）である。これらのことは、当該事件の審理に当たり、いまだ聖俗混在状態であり、世俗権力のみが決定するというわけではなかったことを示している。しかし、その判決に当たり、教会法ではなく、世俗の法が持ち出されていることは近代国家が形成されようとしていた18世紀ロシアの国家と社会を考える上で重要である。

上で述べた現存する史料の日付から見て、聖俗両界における情報獲得に時間の差があったことを窺わせる。元老院文書は1734年11月9日付のものが最初であるが、最初の宗務院文書類は1740年7月のもので、すでにヤーロフは処刑されて4年余りが過ぎていた。このことは上記のことと関係があるのであろうか。とはいえ宗務院が1740年まで事件についてまったく知らなかったとは考え難い。というのも、「(30番) 1734年11月9日の日付のあるカザン県から元老院宛て報告書」が宗務院文書の中に入っており、また実際に聖職者2名が世俗の裁判で審理を受けていたからである。以上の点を含めて、別の角度からいま一度事件について考えてみよう。

第2節 「呪術師（魔法使い）」ヤーロフの事件をめぐる諸問題

シンビルスク市

ヤーロフが生きたシンビルスクはどのような町であったのだろうか。1648年、新しい「シンビルスク境界線（Синбирская черта）」強化のために派遣された貴族ヒートロヴォは、ヴォルガ川の高い沿岸部に沿岸にいたモルドヴァ人に対抗してシンビルスクを建設した。都市の開基から18世紀末まで、Симбирск は Синбирск と書き慣わされていた。その名称は現在のシンビルスク市よりもヴォルガ川を13ヴェルスタ（1ヴェルスタ＝1.067キロメートル）下った地点にボルガルの都市シンビルスクを建てたブルガルの公シンビルに由来するとも、あるいはチュヴァーシ語ないしはスカンジナビア語に由来するとも言われる。ヒートロヴォと共に、シンビルスクにはアルザマスの大貴族（бояр），ニジェゴロドの大貴族，他の地域の貴族や小貴族（дети боярские），タタールのムルザ，および他の勤務人がやって来た。都市建設のためにモスクワ国家の他の地域から担税民（тяглые люди）が集められた。1652年，都市はすでに完成した。都市の主要部分は，丸太の壁で囲まれ，幾つもの塔を有し，堀がめぐらされ，規則正しい四角形をしていた。またここは「クレムリ」，「要塞」，および「丸太の都市」と呼ばれ，シンビルスク山の頂上にあって，縦横それぞれ200サージェン（1サージェン＝2.134メートル）であった。その周りには壁があり，堀と土塁によって囲まれているボサード（商工地区）があり，さらにスロボダ（貢税の義務を負わない，いわば自由農民の村）が存在していた。

1670年、シンビルスクはステンカ・ラージン軍の包囲に耐えた。2年後にはエサウールのフェリカ・シェルジャーク率いるカザーク叛乱軍を撃退した。カザーク叛乱鎮圧後、シンビルスクは周辺地域の植民事業において特に重要な位置を占めるようになった。シンビルスクへの「長きにわたる定住のために（за долгое сиденье）」、勤務人には多くの無主地が与えられた。間もなくそこは他の場所からやって来た農民や自由意思の移住者たちの居住地となった。また1773年と75年には叛乱の指導者ブガチョーフ本人が同地の牢獄に繋がれている。

都市そのものも大いに発展した。1679年、シンビルスクには605戸、1,679人の住民がいた。それには勤務人、「丸太の都市」の住民、修道院は含まれていない。1670-80年代、ポサード民504戸、1,334人、勤務人0戸、396人、他114戸、282人である。1722年の登録簿によると、ポサード民は2,097人であった⁽¹¹⁹⁾。1755年の第2回納税人口調査によると、沿ヴォルガ地方の都市人口は5,806人で、この地方における全人口の1.94%にあたっていた⁽¹²⁰⁾。以上のことから、1730年代、シンビルスクの人口はおよそ5,000人であったと推定される。

都市人口の増大は、18世紀前半における農民の大量流入が関係している。抑圧を逃れて、大量に農民が都市に入ってきたのである。1729年の布告により、われわれは次のことを知る。「ニージニー・デ・ノーヴィー・グラード〔ニージニー・ノヴゴロド〕のポサードの地には、パスポートを所持し、また所持せずに、やって来た多くの御料地農民、高位聖職者領農民、修道院領農民、および領主農民が住んでいる」。彼らは自らの支配者の手を逃れて自分の意思でやって来たのである。逃亡農民の多くは辺境の諸都市に住み着いた。アストラハンでは、彼らは漁業に携わった。シンビルスクでは、「商人のもとで労働者」として暮らした。この時期、多くの逃亡民は様々な都市の工場で働いていたのである⁽¹²¹⁾。モスクワとペテルブルクにはそのような人が多くいたが、より多くの逃亡農民はウクライナに定着したのである⁽¹²²⁾。ヴォルガ中流域最大の都市は穀物交易で大きな役割を果たしたシンビルスクとカザンであった⁽¹²³⁾。

1780年、総督官庁によると、シンビルスクの人口は約1万人であった。19世紀に入ると、1838年には1万7,379人、1856年には2万6,521人、1876年には2万8,041人である。そして1897年（第1回国勢調査）には4万3,298人であり、その内訳は、男性2万1,859人、女性2万1,439人である。1897年当時の身分について言えば、貴族は8.8%、聖職者0.8%、商人と名誉市民3.2%、町人57.5%、農民11.0%、軍人17.7%、他の身分および外国人1.0%である。宗教に関して、正教徒は96.9%、イスラム教徒は約3%である。

人口の増加に伴って、商業が増大したが、他方では、都市の軍事的な意義が失われていった。18世紀初頭までに、8つの門を持つ木造の要塞は廃墟と化してしまった。行政上、シンビルスクは、1708年にカザン県に、1717年にはアストラハン県に、1728年には再びカザン県に編入された。1780年、そこから独立してシンビルスク総督管区の中心都市となり、1796年には県都市となった。19世紀には、穀物、魚、家畜、材木を扱う商業の中心となった。1790年代に

は最初の公共劇場が開設され、1840年代には図書館が建てられた。1832年、シンビルスクに独立した大主教職が置かれた⁽¹²⁴⁾。

以上から、シンビルスクは近世に形成・発展した典型的な地方都市ということになる。しかし、これからだけではなぜこの都市に当該の事件が発生したのか答えを導き出すことは困難である。つまりこの事件はシンビルスクに特有のものではなかったのかもしれない。

ヤーコヴ・ヤーロフとは誰か？

さてヤーロフの事件はいかなる意味を持つのか、それを幾つかの論点に整理したうえで検討しよう。ヤーコヴ・ヤーロフはどのような人物なのか。いつどこで生まれ、何を生業としていたのか。事件の背景は何か、等々である。しかし、われわれが手にする現存する史料はそれについて何も語ってはくれない。そもそも「ポサード民」のような一般庶民に関する史料など通常は存在しない。以下、そうした史料的な限界を確認したうえで論じることにする。

史料の中では、魔法使い・呪術師（волшебник, волшебство）、瀆神者（богохульник）、背教者（богоотступник）、あるいは異端者（еретик, еретичество）、などの用語が混在している⁽¹²⁵⁾。ヤーロフの妻は夫を異端者および背教者として「密告」した。彼女の言葉によると、ヤーロフが「屋根裏部屋へ入るのを見た。そこには聖者の顔が壁に掛けられてある幾つもの聖なる似姿（イコン）がある。水をコップに注いでから、土を紙の上に乗せた。両手に蠟燭をとってから、その水の上、土の上、蠟燭の上に対して、自らの異端の書に従って異端を行った。また西に向かってうつ伏せになって左手でお祈りした。横たわって寝て、その後、起き上がり、水で顔を洗わず、聖なる似姿（イコン）に対して拝まず、十字も切らなかった」⁽¹²⁶⁾、というのである。

またヤーロフは、妻に対して、「聖なる似姿（イコン）に対して拝むこと、水で顔を洗うこと、十字を切ること、以上のことを禁じた。そして妻に、妊娠して（как она была чревата）子供が産まれたら、その赤ん坊に洗礼を施すためにその父であるサタンに差し出すようにと語った」⁽¹²⁷⁾。こうしたことから、O. Д. ゴレルキナとO. Д. ジュラヴェリは悪魔と契約を結んだ人間の一人としてヤーロフを研究対象としたのである（本稿「はじめに」を参照）。

以上が、妻によるヤーロフについての証言である。しかし上記以外の点については不明のままである。

予言者あるいは占い師か？

ヤーロフは占いの詩編（Гадательный Пусалтырь）によって人骨を並べている。「占いの書」に関しては、詩編の聖詩に従ってのみ、どの道を行くべきか、点の付いた骨を放り投げた。どのように骨が落ちるのか、その書で見極めたのである」⁽¹²⁸⁾。これもヤーロフの妻による証言で

ある。

18世紀前半、テキストや占い表を頼りに占うことは特にアルカイックで中世的な特徴を有していた。新しくヨーロッパから翻訳されて入ってきた占いに関する著作はやっと18世紀後半になってロシア社会に広まった。18世紀前半においては、詩編、ダヴィド王の予言⁽¹²⁹⁾、ラフリ⁽¹³⁰⁾、アリストテレスの門⁽¹³¹⁾に従って占われ、日の吉兆についての説話、預言者にして賢者ヴァルラーム⁽¹³²⁾の予言、様々な由来の一種の『外典』(Трепетник)やほかの古代のテキストが多く読まれたのである。14世紀以来、予言に関する文献は偽の書や神を否認する書についてロシアの目録一覧に入れられ、17世紀においては、その目録に予言に関する20作品以上の書籍が含まれていた。18世紀、作品は保存され、筆写され続けたのである⁽¹³³⁾。

ヤーロフはそれらを読み、その影響を受けていたのかもしれない。しかし占いについて、上記の妻の証言以外、彼が何を占ったのか、誰のためなのか、その目的は何なのか、あるいはその後の活動など依然不明のままである。

「異端者(еретик)ディオニーシイとヴァルラーム」の弟子？

それではヤーロフの証言に出てくるディオニーシイとヴァルラームとはいったい誰なのか。またヤーロフが自らの信仰を述べるにあたり依拠したとされる「不可思議な書」とは何か。この点について、史料の最初の紹介者であるД. サボージニコフは以下のように推論する⁽¹³⁴⁾。

ロシア古儀式派の歴史の中に異端者ディオニーシイとヴァルラームの名前を見出すことはできない。しかしヤーロフの証言の中には「何かしら」謎めいたものがあると同時に、14世紀のギリシア、その後のイタリアにおいて、(彼の証言と信仰のなかにある若干の誤解にはもちろん注意しなければならないのだが) たまたま彼が手に入れることになった書に書かれている教義との類似性が認められる。

ここでヴァルラームについて説明しておこう。この人物はいわば時代の子であった。彼は「教養が高く、明敏にして雄弁、カトリックのしきたりの中で育った」人物である。ビザンツ帝国の聖救世主修道院(монастырь Святого Спасителя)の典院として、彼は皇帝によって「聖ディオニーシイの教えを解説することを」託された。その後、時を経て、われわれはヴァルラームがすでにコンスタンティノーブルで活動する異端者となっていることを知るのである。彼の教義はまさにディオニーシイによって与えられたドグマに端緒がある。ヴァルラームはその道をまっすぐに進み、「光明(свет)」すなわち正教の信仰によると聖霊降臨と聖霊の顕現はわれわれ人間の思惟よりも低い、との結論に達するのである。彼はこれを「太陽の光(луч солнца)」になぞらえている。こうした理解の原因は、彼がテッサロニケ修道院の「静寂主義者たち(Исихасты)のところに」立ち寄り、そこの修道士たちが彼に「まるで最も深遠なる宗教的な雰囲気にいる間に、彼らが神の光明を見る栄誉に浴する」と語ったことに由来する。

ヴァルアラムの教義のなかでは次のように簡潔に述べられている。「タヴォル山に現れ出た光は神の光明、大天使たちの光明でなかっただけでなく、本質的には私たちの思惟よりも低いものである。われわれの思惟はうわべの感覚の支配下にあるのではない。神の光明を肉体の目で、すなわち不完全かつ神の恵みによって清められていない人間の目で、空間に現われて大気に色をつける何かしら形而下的なものとして見ることができたとしても、私たちの思惟を目にすることはできない」⁽¹³⁵⁾。このような理解に対して、ヴァルアラムおよび彼と意見を同じくする人々の甚だ反宗教的な教義をありとあらゆる方法で退け、悪魔との交流であるとしてその教義を避けるようにというコンスタンティノーブル総主教による正教信者への呼びかけがなされたのである⁽¹³⁶⁾。

ヴァルアラムの教えについて、われわれはヤーロフとの関連で、以上のように推測することができるかもしれない。しかしそうだとすると、またたとえ名前だけだったとしてもどのようなしてヤーロフはヴァルアラムの教えを知ることができたのだろうか。またその教えを知り得たのはヤーロフだけだったのだろうか、等々。そうした疑問は依然未解決のままである。

またディオニーシイとは誰なのかという疑問も残る。上で述べたヴァルアラムの師かも知れないが、ヤーロフの出現以前に異端を疑われたディオニーシイなる人物がロシアには存在する。1702年、ズヴェニゴロドのサヴィノ＝ストロジェフスキー修道院の長老ディオニーシイ・グレクは、モスクワのボロタで、彼によって書かれた魔法の「異端の書付」と共に火刑になった⁽¹³⁷⁾。この人物であるという可能性も残るが断定はできない。以上はヤーロフが「異端」であるという前提に立っての推論である。

「治療師」か？

しかし上の推測に反対の見解もある。ヤーロフは草や人体について熟知している治療師に過ぎないというのである。すなわち彼は治療を望んでやって来る病人に援助の手を差し延べただけであると。拷問によって得られた自白はそのことを裏付けているかのようである。彼は所有していた「書に基づいて」すべてを語ったが、彼の尋問を行った人々には、この書はヤーロフがそれに従って「魔法を使う・呪術を行う（колдовать）」ことができる「異端」の書のように思えたのである。

注目すべきは、ヤーロフが治療師としてシンビルスク住民の信頼を勝ち得ていたことである。史料の中では、治療師（лекарь）という言葉が見える。史料によると、「彼ヤーロフはシンビルスクで、シンビルスクのポサード民たちの懇願に応じて、すなわちピョートル・カラームィシェフ、彼の弟ガヴリーロ、イヴァン・イズジェベルスキイ、彼の息子の嫁であるマリア・イヴァーノヴァ、グレゴリー・デレヴァーギン、家でどのように呼ばれていたのか記憶にないその息子の嫁、以上の人々の懇願に応じて治療を行ったのである。彼らカラームィシェフ、イ

ズジェベルスキー、およびデレヴァーギンたちの求めに応じたものである。彼らはそのこと〔ヤーロフは治療することができるということ〕について知っていたのである。彼ヤーロフは異端の書によってでもなく、また魔法（呪術）によってでもなく治療した。ただ彼は祈りを捧げただけである。その祈りは洗礼の際の祈禱書に印刷されている祈りであるが、悪魔ゆえ（от бесов, нечистых духов）に禁止されているのである。すなわち3つの祈りである。何となれば、彼ら病める者たちはその点において理性を持たなかったからである。そしてシンビルスクでの審理において、その治療は送付された魔法（呪術）に関する布告が〔シンビルスクに〕到着するまでなされたと証言した。神を否認するその異端について、彼らカラームィシェフとその他の誰も彼〔が異端であること〕について知らなかった。『シンビルスクのポサード民であるガヴリーロ・カラームィシェフ、イヴァン・イズジェベルスキイの息子の嫁であるマリア・イヴァーノヴァ、およびグレゴリー・デレヴァーギンの息子の嫁であるマトリョーナ・イヴァーノヴァは次のように証言した。彼らの家に彼ヤーロフが彼らの懇願により彼らのもとにたびたびやって来た。彼らはヤーロフによって触れられた草の入った水を飲み、彼を治療師として尊敬した』⁽¹³⁸⁾、という。

以上のことから、ヤーロフの「治療師」としての重要な側面が見えてくる。しかも、その噂を聞きつけてか、市内の多くのポサード民が懇願して彼を迎え入れたのである。

国家と教会の対応

カザン県官房から元老院へ宛てた報告では、ヤーロフに対する処罰をいわば当時の法律に基づいて合法的に行おうとしていた。すなわち『ウロジェーニエ（1649年会議法典）』第1章第1条を根本法令とし、『陸軍操典』・『海軍操典』、その後の1731年5月25日付の呪術師に関する布告、直接的には1736年3月18日付のアンナ女帝の命令に基づき処罰（火刑による処刑）が行われた⁽¹³⁹⁾。そしてこの事件がロシアにおける呪術師の最後の処刑となったのである（本稿第2章第2節を参照）。

ここで注意しなければならないのは元老院と宗務院との関係である。実際に事件の調査・尋問・判決・処刑を主導したのは元老院であった。宗務院文書に現れた事件についての最初の史料は1740年7月の文書が最初である。しかもそれは元老院からの事件の概要を伝える報告が宗務院に送られ、そこで事件について宗務院の議事録に書き留められたものである。そこでは、もしヤーロフが本当に改悛しているのであれば生命を奪うことはないと提案されていたのである。それはどういうことなのか。宗務院は調査・尋問の過程で適宜情報を得ていなかったのではないかという疑問が生じる。しかしすでに処刑は行われていた。史料によると、宗務院にはカザン県官房がこの事件を所管し、女帝の布告（命令）を持っているという認識があった⁽¹⁴⁰⁾。

以上の点をどのように考えるべきであろうか。聖界ではなく俗界が専ら呪術問題を裁くことになったということであろうか。確かにピョートル1世以降の法律は呪術に対する世俗の積極的な関与を示している。ピョートルの法律は『陸軍操典』や『海軍操典』などの軍人服務規定が中心であるが、明確に呪術行為を禁じていた。アンナ女帝時代の1731年5月25日、呪術を行った者に対しては火刑による極刑で臨むものの、元老院は呪術師をペテン師として判決を下すことを命じた。確かにこの時期、宗務院を頂点とする聖界が呪術行為に対して積極的に関与しようとする姿勢を見ることはできない。結局のところ、ヤーロフは「治療師」としてではなく、「呪術師」・「異端者」として、さらには国家にとって秩序を乱す危険人物として処罰されたように見える。この点にこそ聖界ではなく世俗当局が主導権を握った理由があったのかもしれないし、ここに1730年代（アンナ女帝時代）のロシア国家のあり方を見ることができるのかもしれない。

すでに述べたように、アンナ女帝とエリザヴェータ女帝の1731-61年の30年間は呪術問題に関する裁判件数が最大となった時代である。ロシア政府はその対策に急いでおり、そのためにも厳然たる態度をとらざるを得なかった。エリザヴェータ女帝もアンナ女帝の1731年布告に従って呪術師を裁いたが、その法律はすでに見たように、「呪術師が自身で害をなし、あるいは誰かのために呪術を行ったことが明らかとなった」場合にのみこの犯罪に対する死刑を認めつつも、鞭あるいは笞によるより軽い刑罰を命じる余地も残されていたのである。他方、すでに宗務院は純粋に宗教問題にのみ関わり、呪術問題には直接関わらない姿勢をとっていた。先のヤーロフに対する軽微な処罰を求める提案には以上の状況が関係していたのではないだろうか。

おわりに

ロシア史において魔術・呪術が問題となるのは、ロシア人の宗教的2重性という問題からであろう。すなわちロシアでは、他のヨーロッパの国々とは異なり、バガニズム（異教信仰）とキリスト教が何百年にもわたって共存するという、いわゆる2重信仰（двоеверие）の現象が見られた。ロシアの宗教・精神界におけるこの特徴は、しばしば宗教のおよび文化的なアンビヴァレンスにおける結果とされた。そのことが魔術・呪術に対する民衆の肯定的な態度を醸成する上で大いに「力」があり、またそれが民衆の習慣となり生活全般に浸み込んで行ったのである。

しかしロシアの教会は民衆が異教的方法を諦めるように、すなわち2重信仰を放棄するように幾世紀にもわたって説得してきたが、それは功を奏したとは言えなかった。むしろ、17世紀には、この2重信仰という「伝統」が、ロシアを全面的な「魔女狩りの狂気」に陥ることを救いながら、民衆とそれを告発しようとする役人の間での魔法・呪術に対する畏れを中和させ

てきたと言えよう。

18世紀は「理性に対する信仰（разумная вера）」と伝統的世界観が激しくぶつかり合うコンフリクトな時代であった（スミリャンスカヤ）。徐々に宗教問題のみを扱うようになった教会に代わり、国家はもはや呪術行為を民間に伝わる旧習とみなすだけでは済まなくなった。むしろ秩序を揺るがす大事であり見逃すことができないと考えていた。こうした問題に近世国家は総力を挙げて取り組んでいったことを諸法令は示している。特に、本編で述べたように、18世紀中葉の30年間は呪術問題に関する裁判件数が最大となったこともあり、政府はなお一層危機意識を募らせていった。しかし同問題に関する地方の情況報告を求める宗務院に対して、ほとんどの主教たちは民間の習慣を見て見ぬふりをし、管区内ではすべてがうまくいっていると報告をしていたのは注目すべきである。これこそが現実的対応であり、呪術問題に関する裁判件数の公式の数字さえ疑わせるのである。

ヤーロフの事件は以上の情況のもとで発生した。端的に言うならば、呪術の問題に対して近世ロシア政府がその監視を強めていたまさにそうした時に事件が起こった。しかしヤーロフについてはっきりと分かっていることは、彼が「治療師」としての行為を行い、シンビルスクのボサード民はその彼にすがっているということだけである。彼が「呪術師」であり「異端者」であるということは、妻の「密告」および尋問から浮上し、またそれと疑わしき書物が見つかったはいるものの明確な断定を下すことはできない。とはいえ結果として、彼を「治療師」としてではなく、「呪術師」や「異端者」として裁判審理がなされ、判決が下された。いわば政府主導の下で全般的な「社会の規律化」過程の進行が眼に見える形となって現れたのである。その意味では、ヤーロフ事件は帝政時代ロシア民間習俗に対する国家による締め付け強化の過程の一つとして位置づけられるべき出来事であった。しかしながら本編の主人公ヤーコフ・ヤーロフについてはこの事件に関するもの以外何も史料が残っていない。その意味では、まさに「名もない庶民」の起こした忘れ去られるはずの事件であった。

しかし、ヤーロフ事件は当局による厳罰の対象となった。最初の紹介記事の著者サボーニコフが有名な『ロシアの分離派における焼身自殺』の著者であるとすれば、彼には古儀式派研究の一環としてこの史料を紹介する、すなわち古儀式派の一端を見出そうとする意図があったのかもしれない。つまりこの問題は単に政府が言う「異端」として片づけられない側面があるのかもしれないということなのである。史料の限界もあり、この点について筆者は未だ答えが見いだせないままである。

呪術の問題は習俗慣習という覆いを被った民衆の宗教観・世界観・宇宙観の一面でしかない。またスミリャンスカヤが扱っているように、瀆神や異端、さらには西欧プロテスタンティズム受容の問題など考えるための材料は一つではない。今回は、その一端を示したに過ぎないのである。

図1 『農民の婚礼にやって来た呪術師』(B. M. マクシーモフ, 1875 年)



出典：『トレチャコフ美術館』「図録 トレチャコフ美術館」刊行委員会，1989 年，63 頁

注

- (1) なお、本稿は「第9回日本18世紀ロシア研究会大会」(2011年9月22日、於明治大学)での報告原稿、および「18世紀ロシアにおける国家と民間習俗の相克——シンビルスクの「魔法使い」ヤーロフの裁判を中心に——」『日本18世紀ロシア研究会年報』9, 2012年に大幅に手を加えたものである。
- (2) K. ギンズブルグ(竹山博英訳)『ベナンダンティ：16～17世紀における悪魔崇拝と農耕儀礼』せりか書房，1986年(増補版の原著は1972年に刊行)，同(杉山光信訳)『チーズとうじ虫：16世紀の粉挽屋の世界像』みすず書房，1984年(2012年に改訳再版。原著は1976年に刊行)。
- (3) E・ル・ロワ・ラデュリ(井上幸治ほか訳)『モンタイユ：ビレネーの村 1294～1324年』刀水書房，1990・1991年(原著は1975年に刊行)，同(蔵持不三也訳)『南仏ロマンの謝肉祭：叛乱の想像力』新評論，2002年(原著は1979年に刊行)。
- (4) Y-M. ベルセ(井上幸治監訳)『祭りと叛乱：16～18世紀の民衆意識』新評論，1980年(原著は1976年に刊行)。
- (5) N. Z. デーヴィス(成瀬駒男・宮下志朗・高橋由美子訳)『愚者の王国 異端の都市』平凡社，1987年(原著は1965年に刊行)，同(成瀬駒男訳)『帰ってきたマルタン・ゲール：16世紀フランスのにせ亭主事件』平凡社ライブラリー，1993年(原著は1982年に刊行)。
- (6) E. P. トムスン(福井憲彦訳)「ラフ・ミュージック——イギリスのシャリヴァリ——」『魔女とシャリヴァリ』新評論，1982年(原著は1972年に刊行)。
- (7) M. パフチン(川端香男里訳)『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房，1985年(原著は1965年に刊行，2007年に杉里直人訳が刊行)。
- (8) 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界——』平凡社，1974年。
- (9) Briggs R. *Witchcraft and Neighbours. Social and Cultural Context of European Witchcraft*,

- Oxford: Blackwell Publishing, 2002, 2nd ed., p. 356.
- (10) Trevor-Roper, H. R. 'The Witch-Craze of the Sixteenth and Seventeenth Centuries,' in *Region, the Reformation and Social Change*, London: Macmillan, 1967, p. 185.
- (11) Cohn, Norman, *Europe's Inner Demons: An Enquiry inspired by the Great Witch-Hunt*, New York: Basic Books, Inc., publishers, 1975, p. 253 (山本通訳『魔女狩りの社会史：ヨーロッパの内なる悪霊』岩波書店, 1983年, 350頁, ただし, 本文の引用では表現を変えたところがある).
- (12) Новомвергский Н. Я. Колдовство в Московской Руси XVII-го столетия. (Материалы по истории медицины в России. Т. 3. Ч. 1.). СПб., 1906 (реп. изд. М., 2004). xxxii. また, Арциховская Е. О колдовстве, порче и кликушестве. СПб., 1905. С. 10. も同様の見解である。
- (13) 注(12)で挙げたノヴォンベルグスキーの史料以外に以下も参照されたい。Новомвергский Н. Я. Слово и дело государевы (Материалы). Т. II. Томск, 1909 (реп. изд. М., 2004).
- (14) Смилянская Е. Б. Волшебники, Богохульники, Еретики: народная религиозность и «духовные преступления» в России XVIII в. М., 2003. С. 87-88. なお, 魔女, 女性, 神話の相互関係を考える次の著書も参照されたい。ジョアンナ・ハップズ (坂内徳明訳) 『マザー・ロシア——ロシア文化と女性神話』青土社, 2000年 (原著は1988年に刊行), 特に第2章が重要である。
- (15) ジェフリ・スカル, ジョン・カロウ (小泉徹訳) 『魔女狩り』岩波書店, 2004年 (原著は2001年に刊行), 87-88頁。
- (16) Zguta, Russell, 'Witchcraft Trials in Seventeenth Century Russia,' *American Historical Review*, 82-5 (1977), p. 1196. なお, A. C. ラヴローフによると, ズグータはノヴォンベルグスキーの有名な刊行された呪術師 (魔法使い) 裁判に基づく数字を挙げているにすぎず, 「それゆえルフやシューヤの数十人についての『悪霊にとり憑かれた女たち』の?—筆者) 裁判を含んでいない。最も残念なのは17世紀最後の30年代の呪術師裁判が入っていないことである。すなわちその数字は18世紀最初の30年間と何よりも論理的に比較し得たであろう」。つまり呪術師の起訴件数という意味において, ラヴローフによって導かれた1700-40年代の数字は17世紀末の数字がはなはだ闇に包まれていることを示しているのだという (Лавров А. С. Колдовство и религия в России: 1700-1740 гг. М., 2000. С. 353)。なお, 本稿では, 紙幅の関係上, 魔法使い・呪術師の男女比について論ずる余裕はないが, ロシアでは男性の方が多い点に関して, アイスランドおよびバルト海沿岸地方 (フィンランドとエストニア) がロシアと同じ傾向を示しているという (Ryan, W. F., 'The Witchcraft Hysteria in early Modern Europe: Was Russia an Exception?,' *The Slavonic and East European Review* 76-1 (1998), p. 73)。
- (17) Лавров А. С. Указ. соч. С. 89-132. スミリャンスカヤは呪術師のなかに獵師も加えている (Смилянская Е. Б. Указ. соч. С. 79)。なお, 18世紀の喜歌劇『粉挽人—呪術師, ベテン師そして媒酌人』(А. О. Абрешиер-Мов作, 1779年初演) はモスクワとサンクト・ペテルブルクで上演されると直ちに人気を博したという。粉挽人=「呪術師」(そしてベテン師) という当時の人々にとっての観念をそこに見ることができる (Аблесимов А. О. Мельник-колдун, обманщик и сват//Русская драматургия XVIII века. М., 1986. С. 245-273, 505-509)。またイヴァン雷帝時代のオプリーチニナを扱ったА. К. Толстойの『白銀公爵』に出てくる魔法使い (妖術使い) は粉挽き人 (水車小屋番) であったことを想起すべきかもしれない (А. К. Толстой (中村融訳) 『白銀公爵』(上) 岩波文庫, 1951年)。
- (18) Померанцева Э. В. Художник и колдун//Советская этнография. 1973. № 2; Она же. Фольклорные материалы «Этнографического бюро» В. Н. Тенишева//Советская этнография. 1971. № 6.
- (19) 坂内徳明「大ロシア北部の婚礼と呪術師」『なろうど』(ロシア・フォークロア談話会会報) 2, 1980年。
- (20) 同上, 1-2頁。
- (21) 白石治朗『ロシアの神々と民間信仰—ロシア宗教社会史序説』彩流社, 1997年。

- (22) 坂内徳明「ロシアにおける民俗学の誕生」『一橋論叢』108 (3), 1992 年, 426 頁。
- (23) Виноградов Н. Н. Заговоры, оберети, спасительные молитвы и порч. СПб., 1909. Т. 1-2; Елеонская Е. Б. Заговор и колдовство на Руси в XVII и XVIII столетиях//Русский архив. 1912. 4. С. 611-624 (後に Елеонская Е. Н. Сказка, заговор и колдовство в России. Сб. Трудов. М., 1994 に再録); Ефименко П. Суд над ведьми//Киевская старина. 7 (ноября 1883). С. 374-401; Забылин М. Русский народ. Его обычаи, предания, обряды и суеверия. М., 2003 (1-е изд. 1880); Майков Л. Н. Великорусские заклинания. СПб., 1869 (М., 1997 に再版); Максимов С. В. Нечистая, неведомая и крестная сила. СПб., 1903; Новомвергский Н. Я. Колдовство в Московской Руси XVII в.; Он же. Материалы по истории медицины в России. 4 тт. СПб., 1905-7; Он же. Врачебное строение в до-петровской Руси. Томск, 1907; Познанский Н. Заговоры. Опыт исследования происхождения и развития заговорных формул. СПб., 1917 (М., 1995 に再版); Попов Г. Русская народно-бытовая медицина. По материалам этнографического бюро князя В. Н. Тенишева. СПб., 1903; Сахаров И. П. Сказания русского народа, собранные И. П. Сахаровым. СПб., 1885 (М., 1989 に再版)。
- (24) Ильинская В. Н. Заговоры и историческая действительность//Русский фольклор. XVI. 1976. С. 200-207; Лавров А. С. Указ. соч.; Никитина Н. А. К вопросу о русских колдунах//Сборник музея антропологии и этнографии. Т. VII. 1928. С. 299-325; Покровский Н. Н. Тетрадь заговоров 1734 года//А. Т. Москаленко (ред.). Научный атеизм, религия и современность. Новосибирск, 1987; Сидоров А. С. Знахарство, колдовство и порча у народа коми. Л., 1928 (1997 年に再版); Е. Б. Смелянская. Указ. соч.; Турилов и А. В. Чернецов А. А. О письменных источниках изучения восточнославянских народных верований и обрядов//Советская этнография. 1986. № 1; Христофорова О. Колдуны и жертвы. Антропология колдовства в современной России. М., 2010; Черепнин Л. В. Из истории древне-русского колдовства XVII в.//Этнография. 1929. № 2. С. 86-109. P. G. ボガトウイリョーフ (千野栄一・松田州二訳)『呪術・儀礼・俗信 ロシア・カルパチア地方のフォークロア』岩波書店, 1988 年 (原著は 1929 年に刊行)。
- (25) Ivanits, Linda, *Russian Folk Belief*, Armonk: M. E. Sharpe, Inc., 1989; Kivelson, Valerie A. 'Through the Prism of Witchcraft, Gender and Social Change in Seventeenth-Century Muscovy,' in Barbara Evans Clements et al. (eds.), *Russia's Women, Accommodation, Resistance, Transformation*, Berkley: University of California Press, 1991; Levin, E., 'Supplicatory Prayers as a Source for Popular Religious Culture in Muscovite Russia,' in Samuel H. Baron and Nancy Shields Kollmann (eds.), *Religion and Culture in Early Modern Russia and Ukraine*, Illinois: Northern Illinois University Press, DeKalb, 1997, pp. 96-114; Ramer, Samuel, 'Traditional Healers and Peasant Culture in Russia, 1861-1917,' in Esther Kingston-Mann and Timothy Mixter (eds.), *Peasant Economy, Culture and Politics of European Russia, 1800-1917*, Princeton: Princeton University Press, 1991; Ryan, W. F., 'The Witchcraft Hysteria in early Modern Europe: Was Russia an Exception?,' *The Slavonic and East European Review* 76-1 (1998), pp. 49-84; idem, *The Bathhouse at Midnight: A Historical Survey of Magic and Divination in Russia*, University Park. PA: the Pennsylvania State University Press, 1999; Zguta, Russell, 'The Ordeal by Water (Swimming of Witches) in the East Slavic World,' *Slavic Review* 36 (1977), pp. 220-30; idem, 'Witchcraft Trials in Seventeenth Century Russia,' *American Historical Review* 82-5 (1977), pp. 1187-1207; idem, 'Witchcraft and Medicine in Pre-Petrine Russia,' *Russian Review* 37 (1978), pp. 438-48. 白石治朗, 前掲書, 特に「17 世紀ロシアの魔女裁判」(99-129 頁)。
- (26) 藤原潤子『呪われたナターシャ——現代ロシアにおける呪術の民俗誌』人文書院, 2011 年。昔からロシアに伝わる妖精・妖怪・魔物を現代人の暮らしや心に生きるリアリティを持つものとして物語化したものに、プーシキンやゴーゴリの小説等を除くと次のような作品がある。ソモフ (田辺佐保子訳)『ソモフの妖怪物語』群像社, 2011 年 (O. M. ソモフは 19 世紀前半の作家), テッフィ

- (田辺佐保子訳)『魔女物語』群像社, 2008年(H. A. テッフィの手になる原著は1936年にベルリンで刊行)。また、斎藤君子『ロシアの妖怪たち』大修館書店, 1999年も参照。
- (27) その基礎的研究として次を参照されたい。Toyokawa Koichi, 'Russia in the Age of Enlightenment and I. K. Kirilov's Colonial Policy,' *Japanese Slavic and East European Studies*, vol. 30, 2009, pp. 45-58. 坂内は18世紀を「探検と調査の世紀」という(坂内「ロシアにおける民俗学の誕生」436頁)。
- (28) この点については別稿を用意している。
- (29) 筆者の「歴史的生活空間」という用語については以下を参照されたい。拙稿「ロシア帝国における植民問題の研究——ウラル地方を中心に——」『明治大学人文科学研究紀要』第67冊, 2010年, 125頁。
- (30) Сапожников Д. Симбирский волшебник Яров//Русский архив. (1886) № 3. С. 382-386.
- (31) Сапожников Д. И. Самосожжение в русском расколе (со второй половины XVII века до конца XVIII.). Исторический очерк по архивным документам. М., 1891 (Gregg International Publishers limited, 1971より再版)。
- (32) Горелкина О. Д. Русские повести конца XVII-начала XVIII в. О договоре человека с дьяволом в связи с мифологическими представлениями позднего русского средневековья//Н. Н. Покровский (ответ. ред.). Источники по истории русского общественного сознания периода феодализма. Новосибирск, 1986. С. 47; Журавель О. Д. Сюжет о договоре человека с дьяволом в древнерусской литературе. Новосибирск, 1996. С. 104-105 и др.; またライオンもこの史料を紹介している (Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, p. 422)。
- (33) Лавров А. С. Указ соч. С. 350, 365; Смилянская Е. Б. Указ. соч. С. 71, 129, 136, 198.
- (34) Даль В. И. Толковый словарь живого великорусского языка. Т. 1. СПб.; М. (реп. Токио), 1977. С. 386-387.
- (35) Zguta, Russell, 'Witchcraft Trials in Seventeenth Century Russia,'; Valerie A. Kivelson, 'Witchcraft in Russia,' *The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History*, vol. 55, Academic International Press, 1993, pp. 1-4. 藤原前掲書。
- (36) Hartley, Janet M., *A Social History of the Russian Empire 1650-1825*, London and New York: Longman, 1999, pp. 245-256. ハートレイはその夫の W. F. ライオンから呪術に関する多くの知見を得ていたと思われる。本稿第1章は2人の研究から多くを学んでいる。
- (37) Longworth, Philip, *Alexis: Tsar of All the Russias*, London: Secker & Warburg, 1984, p. 135.
- (38) *Ibid.*, p. 198.
- (39) *Ibid.*, p. 221.
- (40) Hartley, Janet M. *op. cit.*, p. 246.
- (41) Смилянская Е. Б. Доношения 1754 г. в Синод суздальского епископа Порфилия «Якобы во граде Суздале колдовство и волшебство умножилось»//Н. Н. Покровский (ответ. ред.). Христианство и церковь в России феодального периода (Материалы). Новосибирск, 1989. С. 255; Она же. Указ. соч. С. 66-67, 355; Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 70; idem, *The Bathhouse at Midnight*, p. 422, no. 19; Hartley, Janet M. *op. cit.*, p. 246.
- (42) *The Russian Journals of Martha and Catherine Wilmot 1803-1808*, ed. by the Marchioness of Londonderry and H. M. Hyde, London: Macmillan and co., Limited, 1934, p. 286; Hartley, Janet M. *op. cit.*, p. 246.
- (43) この点, W. F. ライオンの本『真夜中の風呂小屋』という表題が象徴的である。
- (44) Hartley, Janet M. *op. cit.*, pp. 246-7.
- (45) *Ibid.*, p. 247.
- (46) R. Pinkerton, D. D. *Russia: or the Miscellaneous Observations on the Past and Present State of*

- that Country and its Inhabitants*, London: Seeley and Sons, 1833, p. 155; Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, p. 34; Hartley, Janet M. *op. cit.*, p. 247.
- (47) *Ibid.*, p. 247.
- (48) Миненко Н. А. Русская крестьянская семья в Западной Сибири (XVIII-первой половины XIX в.). Новосибирск, 1979. С. 130.
- (49) Zguta, Russell, 'The Ordeal by Water,' p. 229.
- (50) Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, p. 422, no. 15.
- (51) *Ibid.*, p. 186.
- (52) *The Russian Journals*, p. 290; Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, p. 186; Hartley, Janet M. *op. cit.*, p. 248.
- (53) Смилянская Е. Б. Указ. соч. С. 48-63; Она же. Скандал в благородном семействе Салтыковых: пагубные страсти и «суеверия» в середине XVIII в.//Россия в XVIII столетии. Вып. 1. М., 2002. С. 74-96.
- (54) Она же. Указ. соч. С. 63-64.
- (55) Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, pp. 49, 98.
- (56) 熊をめぐる習慣については次を参照されたい。A. F. ネクリローヴァ (坂内徳明訳)『ロシアの縁日——ベトルーシカがやってきた』平凡社, 1986年(原著は1984年に刊行), 特に「熊のコメディー」(49-81頁)。そのなかで、熊つかいは民衆の熊の魔力に対する信仰を利用しただけではなく、熊つかい自身が妖術師、魔法使い、「物を知る」人として知られ、さらには病人を「治療した」とある(55頁)。
- (57) Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, pp. 113, 329.
- (58) Hartley, Janet M. *op. cit.*, p. 249.
- (59) Голубинский Е. История русской церкви. Т. 1. первый период. М., 2002 (1-е изд. 1901 г.). С. 623-624 и примеч. 2; Гальковский Н. Т. Борьба христианства с остатками язычества в древней Руси. М., 2000 (1-е изд. 1916 г.). С. 229.
- (60) Там же. С. 229-31.
- (61) 地球から見て太陽が天球上を動く道、黄道の南北にある8度ないし9度ずつの帯状部分を春分点から出発して十二等分したものを十二宮という。十二宮は白羊宮、金牛宮、双子宮、巨蟹宮、獅子宮、処女宮、天秤宮、天蠍宮、人馬宮、磨羯宮、宝瓶宮、双魚宮である。古代の占星者はこの十二宮内にある星が人間の運命に大きな影響を与えたと考え、十二宮の星の位置であらゆる吉兆を決めることができるとした(佐藤靖彦訳『ロシアの家庭訓(ドモストロイ)』新読書社, 1984年, 162頁, 注(80))。
- (62) 佐藤靖彦によれば、カラスの鳴き声で吉兆を判断するための占いの書があった、という(同上, 注(81))。また中村喜和「中世の占ト書「ラフリ」について」『一橋論叢』110(4), 1993年, 682頁も参照されたい。
- (63) 佐藤訳『ロシアの家庭訓』, 54頁。字句に修正を施した個所がある。
- (64) Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 75.
- (65) 中村喜和「「百章」試訳(2)」『一橋大学研究年報 人文科学研究』30, 1993年, 60, 62, 64頁(なお、テキストの底本は以下である。Горский А. Д. Стоглав, в кн.: Российское законодательство X-XX вв. Т. 2. Законодательство периода образования и укрепления Русского централизованного государства. М., 1985)。
- (66) 同「「百章」試訳(3)」『一橋大学研究年報 人文科学研究』31, 1994年, 20頁。
- (67) 同上, 82頁。
- (68) Греков Б. Д. (под общей ред.) Судебники XV-XVI веков. М.; Л., 1952. С. 9, 354, 384.
- (69) Афанасьев А. Н. Поэтические воззрения славян на природу. Т. 3. The Hague: Mouton, 1970 (1-е

- изд. М., 1869), С. 620–621; Соловьев С. М. История России с древнейших времен. Кн. IV. Т. 7–8. М., 1960. С. 352–353; Гальковский Н. Т. Указ. соч., С. 219–220.
- (70) Longworth, Philip, *op. cit.*, p. 54.
- (71) コトシーヒンの犯罪官署の項目（第7章第34項）には、「神の冒瀆、教会財産の窃盗、男色、魔術、黒魔術、さらに使徒や預言者や教父たちの教えに反して新たな邪悪な解説を行って不正な聖書解釈を行う者に対しては焚刑が適応される」とある（コトシーヒン（松本栄三編訳）『ビョートル前夜のロシア——亡命ロシア外交官コトシーヒンの手記』彩流社、2003年、202頁（また Grigorij Kotošixin, *O Rossii v carstvovanie Alekseja Mixajloviča, Text and Commentary*, Oxford: At the Clarendon Press, 1980, pp. 129–130 も参照）。白石治朗、前掲書、47頁。『ウロジェニエ（1649年会議法典）』については次を参照されたい。Соборное Уложение 1649 года; Текст; Комментарии/подгот. текста Л. И. Ивановой. Комментарии Г. В. Абрамовича, А. Г. Маникова, Б. Н. Миронова, В. М. Панеяха. Руководитель авторского коллектива. А. Г. Маников. Л., 1987. С. 19. 中沢敦夫、吉田俊則訳『「1649年会議法典」翻訳と注釈（1）」『富山大学人文学部紀要』第43号、2005年、129頁。
- (72) Афанасьев А. Н. Указ. соч., С. 612; Гальковский Н. Т. Указ. соч., С. 245–246.
- (73) ПСЗ. Т. 5. № 3006. С. 320–321（глава. 1, статья. 1); Владимирский-Буданов М. Ф. Обзор истории русского права. СПб., 1909（6-е изд.）. С. 365.
- (74) ライアンによると、ビョートルの『陸軍操典』中の呪術・魔術に関する諸規則は、スウェーデンのグスタフ・アドルフが導入した軍事法典（1683年版）からの借用であるという（Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 66）。また同時期のプロイセンの『軍人服務規程（1713年7月12日）』にもロシアの場合と同様の規定が見える。「武器を使った魔術、不死身の術、あるいはその他の禁じられている妖術や魔術を使って聖なる神の名を汚したり、神の威厳や神性、功德や秘蹟、もしくは聖書をおとしめ、侮辱し冒瀆した兵士はどのような者であれ、神の法とこの世の法にのっとて処罰されるものとする」（歴史学研究会編『世界史史料6 ヨーロッパ近代社会の形成から帝国主義へ 18・19世紀』岩波書店、2007年、43–44頁）。
- (75) ПСЗ. Т. 6. № 5458. С. 49–50.『海軍操典』は当時のイギリス、フランス、スウェーデンおよびオランダの海軍法典を研究して編纂されたものだった（Peterson, Claes, *Peter the Great's Administrative and Judicial Reforms: Swedish Antecedents and the Process of Reception*, Stockholm, 1979, p. 406）。
- (76) Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 65.
- (77) ПСЗ. Т. 6. № 3963. С. 650. 18世紀における中央と地方の捜査・裁判体制については、拙稿「近世ロシア民衆の意識——18世紀の民衆は何を求めたのか——」『明治大学人文科学研究所紀要』第58冊、2006年、296–297頁を参照されたい。
- (78) Лаверов А. С. Указ. соч. С. 358.
- (79) Там же. なお、処罰が必ずしも厳しいものにならなかった同ような例を、初期啓蒙主義者たち、とりわけクリスチアン・トマジウス（1655–1728年）の影響を受けたプロイセンのフリードリヒ・ウィルヘルム1世による1714年12月13日勅令が示している（Там же）。
- (80) ПСЗ. Т. 8. № 5761. С. 465–466. なお、従来、ラヴローフを含めた多くの研究者はこの布告を1731年5月20日付としているが、『ロシア帝国法大全』の原文では「5月25日」とある。
- (81) Покровский Н. Н. Тетрадь заговоров 1734 года. С. 246.
- (82) Смилянская Е. Б. Указ. соч., С. 189.
- (83) Лаверов А. С. Указ. соч. С. 363–364. なお、ラヴローフが依拠するレヴェンстムの研究は以下の通り。Левенстим А. Суеверия и уголовное право. Исследования по истории русского права и культуры//Вестник права. 1906. Кн. 1. С. 330（筆者未見）。
- (84) Лаверов А. С. Указ. соч. С. 364.
- (85) Там же. С. 365. ライアンは、宗務院（宗教裁判所）がこの事件を知ったのは1740年であり、す

でにこの時、ヤーロフは処刑されていた、としている (Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 72)。

- (86) *Владимирский-Буданов М. Ф.* Указ. соч., С. 365; *Смилянская Е. Б.* Указ. соч., С. 189.
- (87) Там же.
- (88) ПСЗ. Т. 16. № 11698. С. 103.
- (89) ПСЗ. Т. 18. № 12949. Ст. 497. С. 275-276, Наказ, гл. XX, Г.; *Владимирский-Буданов М. Ф.* Указ. соч., С. 365.
- (90) ПСЗ. Т. 19. № 13427. С. 23-25; Т. 21. № 15379. С. 480, 485.
- (91) ПСЗ. Т. 19. № 14231. С. 1068.
- (92) 「良心裁判所は、全ての他の裁判が法に基づいて行われると同じように裁判を行う。しかし良心裁判所は私的・個人的な安全の防護装置として打ち立てられている。次の点があらゆる場合において、良心裁判所の規則にならなければならない。1. いつも博愛であること。2. 人間として尊敬を払うこと。3. 人に対する迫害や圧迫を排除すること。…良心裁判所に送致されるのは次の事件である。愚かさ、ペテンおよび無知ゆえにそうなったのであるが、理性を失った人あるいは未成年者による犯罪、呪術問題、そうした…諸事件である」(ПСЗ. Т. 20. № 14392. С. 278-279; *Кизеветтер А. Совестные суды при Екатерине II/Голос минувшего.* 1923. № 1. С. 135-159)。
- (93) *Смилянская Е. Б.* Указ. соч., С. 198-199.
- (94) *Кизеветтер А.* Указ. стат. С. 142-145.
- (95) *Левенстим.* Указ. стат. С. 329; *Борисов В. А.* Описание города Шуи и его окрестностей. М., 1851. С. 339-340 (Zguta, R. 'Witchcraft Trials,' p. 1201 より転引用)。
- (96) *Смилянская Е. Б.* Указ. соч., С. 193-194.
- (97) *Смилянская Е. Б.* Указ. стат. С. 255; Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 70.
- (98) ПСЗ. Т. 10. № 7450. С. 361-364.
- (99) 例えば、1751 年、4 主教管区のみが迷信について報告し、残りの 20 の主教管区は、彼らのところでは「すべての人が申し分なく神を褒め称えている (слава Богу все добре)」という。1752-53 年、「魔法」については 2 件のみヤロスラーヴリ主教が報告し、27 の報告書では「すべてうまくいっている」と記されている (*Смилянская Е. Б.* Указ. стат., С. 256. прим. 9)。
- (100) Описание документов и дел, хранящихся в св. пр. Синода. 50 ТТ. СПб., 1848-1914. Т. III. (1723). кн. 11-13 (Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 71 より転引用)。
- (101) Там же. Т. III. (1723). кн. 175 (Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 71 より転引用)。
- (102) Там же. Т. X. (1730). кн. 693-94, 1306-07 (Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 71 より転引用)。
- (103) Там же. Т. X. (1730). кн. 529 (Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 71 より転引用); Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, p. 422, no. 15.
- (104) *Покровский Н. Н.* «Исповедь» алтайского крестьянина/Памятники культуры: Новые открытия. Письменность, искусство, археология. Ежегодник 1978. Л., 1979. С. 49-57 (Ryan W. F. 'The Witchcraft Hysteria,' p. 71 より転引用)。
- (105) 当時の「市役所」は市政の執行とともに裁判を司っていた。
- (106) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1223; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 2.
- (107) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1223об.
- (108) Там же.; См. РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 2.
- (109) Там же. Л. 6.
- (110) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1223об. -1224; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 2об, 6об, 12, 14об.
- (111) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1224; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 14об.

- (112) 1731 年 5 月 25 日のアンナ女帝の勅令を指すものと思われる。
- (113) РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 3.
- (114) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1224-1224об.; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 3-3об.
- (115) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1224об.-1225; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 12-12об., 14об.
- (116) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1225; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 14об.-15.
- (117) 1731 年 5 月 25 日付布告のことである。ここでも日付が異なっている。
- (118) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1225-1225об.
- (119) *Водарский Я. Е.* Исследование по истории Русского города. М., 2006. С. 330.
- (120) *Кабузан В. М.* Изменения в размещении населения России в XVIII-первой половине XIX в. М., 1971. С. 71.
- (121) ПСЗ. Т. 8. № 5417. С. 202; № 5953. С. 626-627; Т. 9. № 6858. С. 707-712; Т. 9. № 6924. С. 788-789.
- (122) Очерки истории СССР. Период феодализма. Россия во второй четверти XVIII в. М., 1957. С. 206.
- (123) Там же. С. 154.
- (124) *Ф. А. Брокгауз и И. А. Ефрон* (под отв. ред.) Энциклопедический словарь. СПб., 1900. Т. 58. С. 905-906.
- (125) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1225; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 2, 3об., 4-5об.
- (126) Там же. Л. 3.
- (127) Там же.
- (128) Там же. Л. 2. 詩編に従って占うことについては次を参照されたい。Сперанский М. Н. I Гадания по Псалтири//Из истории отреченных книг. СПб., 1899 (Памятники древней письменности и искусства. Т. 129).
- (129) 夢占いの一種 (cf. Ryan, W. F. *The Bathhouse at Midnight*, p. 151)。
- (130) 十二宮に基づく占星術の書。詳しくは前掲中村論文「中世ロシアの占卜書「ラフリ」について」を参照されたい。
- (131) 中村喜和によると、ビザンツから伝わった『秘中の秘』(*Secreta sectorum*) の翻訳、一種の占いの書であり、古代の哲学者に仮託されていたという (同上, 682 頁, および中村「「百章」試訳 (2)」, 71 頁, 注 13)。
- (132) 佐藤靖彦によると、この名で聖者として記念日のある人物は 4 人いるという (佐藤訳『ロシアの家庭訓』, 168 頁, 注 138)。
- (133) *Смирнская Е. Б.* Указ соч. С. 71.
- (134) *Д. Сапожников.* Указ. стат. С. 383-384.
- (135) Real-Encyclopedie für protestantische Theologie und Kirche; in Verbindung mit vielen protestantischen Theologen und Gelehrten/herausgegeben von Herzog. Stuttgart und Hamburg, Bd. 6, 1856, S. 52-53. そこで述べられているヴァルラームの教義は、ギリシアの神学にしっかりと根付いていた神秘主義の異常なまでの夢想であった (Симбирский волшебник Яров/Русский архив. 1886. 3. С. 383-384)。
- (136) *Недетовский Г.* Варлаамитская ересь//Труды Киевской Духовной Академии. 1872. Февраль. С. 316-357.
- (137) *Смирнская Е. Б.* Указ. соч. С. 197.
- (138) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1224об.-1225; См. РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 3об.-4, 6об.
- (139) РГАДА. Ф. 248. Ед. хр. 792. Д. 30. Л. 1225; РГИА. Ф. 796. Оп. 21. Д. 328. Л. 6об.-7, 15.
- (140) Там же. Л. 8.

Folkway Conflict among the State, Church, and Society in Early Modern Russia: The Case of Iakov Iarov or “Witchcraft” in Simbirsk

TOYOKAWA Koichi

On August 5, 1732, Iakov Iarov, a *posadskie* or tradesman, was arrested on the suspicion of witchcraft or “heresy” in Simbirsk. His wife Varvara Petrova informed Simbirsk’s *Ratusha* or town hall of her husband’s activities. In Iarov’s possession were roots, herbs, spells, and books of divination. He was alleged to have told fortunes using dice and the Psalter. In the three and half years between his arrest and judgment, he underwent a severe cross-examination, including torture. As a result, Iarov admitted denying Christ and calling on Satan, acquiring magic by books, and treating some patients who were tradespeople of the city. Although he was not regarded as a witch or “heretic” but as a respected doctor, the authorities concluded that Iarov’s books contained the views of the “heretic Varram.” Nonetheless, it is unclear how he knew of Varram’s doctrine or who the “heretic Varram” was. On March 18, 1736, the court sentenced the defendant to death by burning.

This case is one of many for heresy, magic, and witchcraft in early modern Russia. An examination of it permits us to understand the regulation of folkways by the state. The judges made their decision based on the *Ulozhenie* or Code of 1649, the *Voinskii Ustav* or the Army Act of Peter the Great of 1715, and the decree of Anna of May 25, 1731.

As it sought to discipline society, Imperial Russia strove constantly for a greater Christianization of the population, eliminating heresy and magic from the Russian folkways. As the Russian chronicles show, since its conversion to Christianity in 988, the Muscovite state struggled to repress paganism. Russia, however, lacked a nationwide code of laws that prohibited paganism, heresy, magic, and witchcraft. In the seventeenth and eighteenth century, the Romanovs promulgated such a code and the rules to punish witches and wizards.

Keywords: folkways, witchcraft, Iakov Iarov, discipline of society